第２章　調　査　の　成　果

第１節　調　査　の　概　要

調査区の北側に汚水管が東西に通っていて、それは調査中も使用されていた。調査区北端からその汚水管までの６ｍほどに関しては、撹乱を甚だしく受け、電気電子棟建物からの漏水が多かったので、当初より調査を断念した。それ以外の調査対象地は、多少の撹乱部分はあったものの、包含層・遺構が良好に残存していた。

遺構面は計５面（第８～10図）あるが、これは我々が作業進行上、任意に設定した遺構検出面であり、当時の生活面を示しているわけではない。明治時代の水田遺構面は海抜0.1ｍ、江戸時代の第１遺構面上半は海抜－0.1ｍ、同第１遺構面は海抜－0.15～－0.17ｍ、同第２遺構面は海抜－0.27～－0.3ｍ、同第３遺構面は海抜－0.4ｍ前後である。

主な遺構を形態別に見てみると、明治時代の水田・揚水施設・暗渠、江戸時代の井戸・土坑・溝・石組み遺構などがある。性格・機能が推定できる遺構の中で最も注目されるのは、重複して検出された石組み船入状遺構Ｓ36と素掘り船入状遺構Ｓ41とである。

遺構の分布密度を見ると、各種の遺構は調査区の北半に集中していたが、南半ではほとんど検出することができなかった。特に溝Ｓ19から南側には、江戸時代の遺構がほとんど存在していなかったことが注意された。

時期別に見れば、第１遺構面に遺構が多い傾向があり、第２遺構面、第３遺構面と面が下がっていくにつれて、遺構の密度は少なくなる。

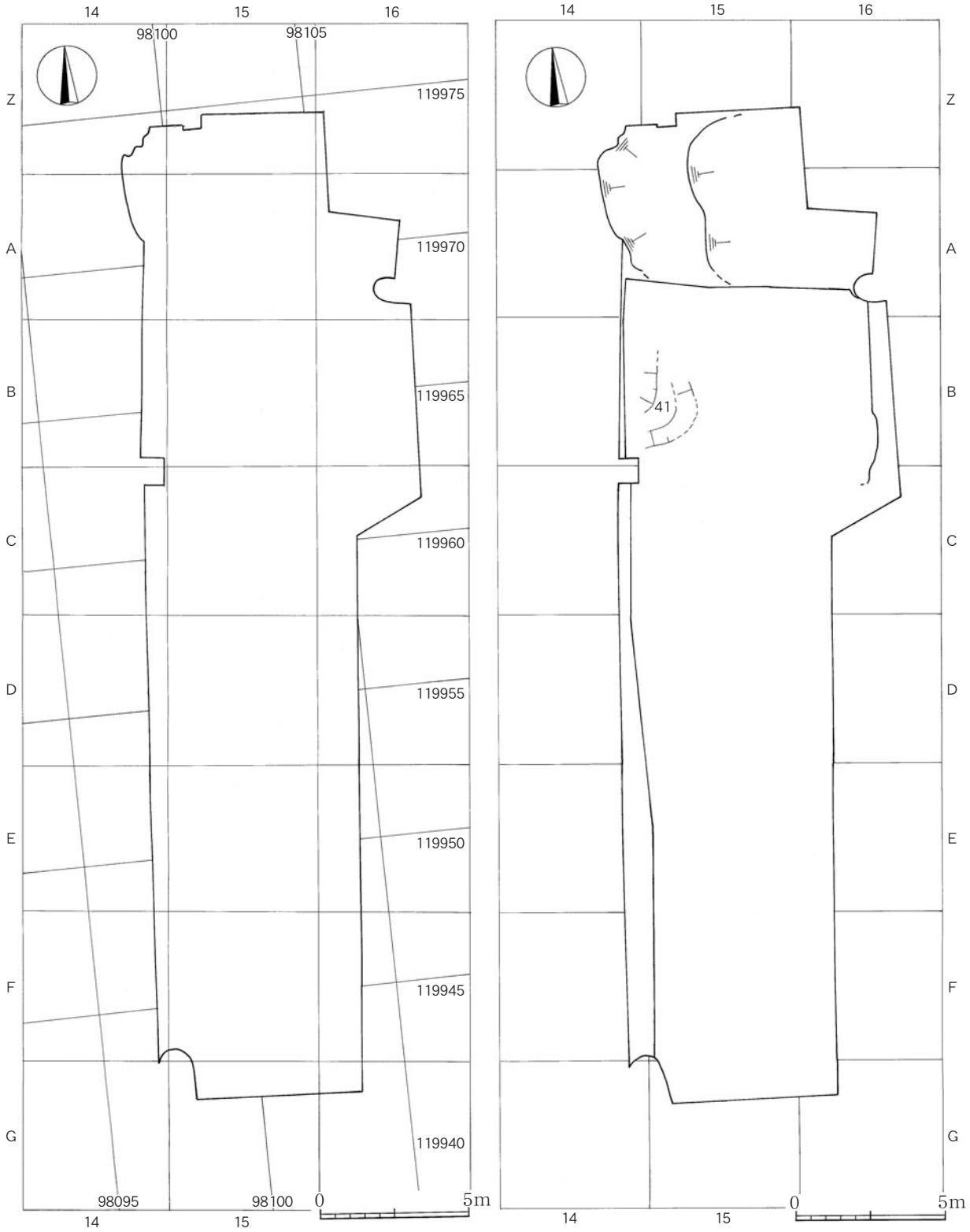
本章ではそれぞれの遺構面ごとに記述をしていくが、上の遺構面では確認できなかった遺構が、掘り下げた下の遺構面で確認される場合があり、同一遺構面での遺構すべてが同時期かやや前後する時期の遺構とは必ずしも言えない。例えば、江戸時代第１遺構面上半では、明治時代水田面の遺構の掘り残しが多々あったが、別途遺構名称を付けてしまっている。このように、同一の遺構であっても掘り足りない場合など、別の遺構番号を付けているが、いずれにせよ発掘現場での遺構番号を変更せずに報告することにした。

遺構番号は検出順であるため、上の遺構面で確認できなかったものの、掘り下げた段階で確認できたものも少なからずあり、必ずしも大きな番号が下の遺構面の遺構とは限らない。

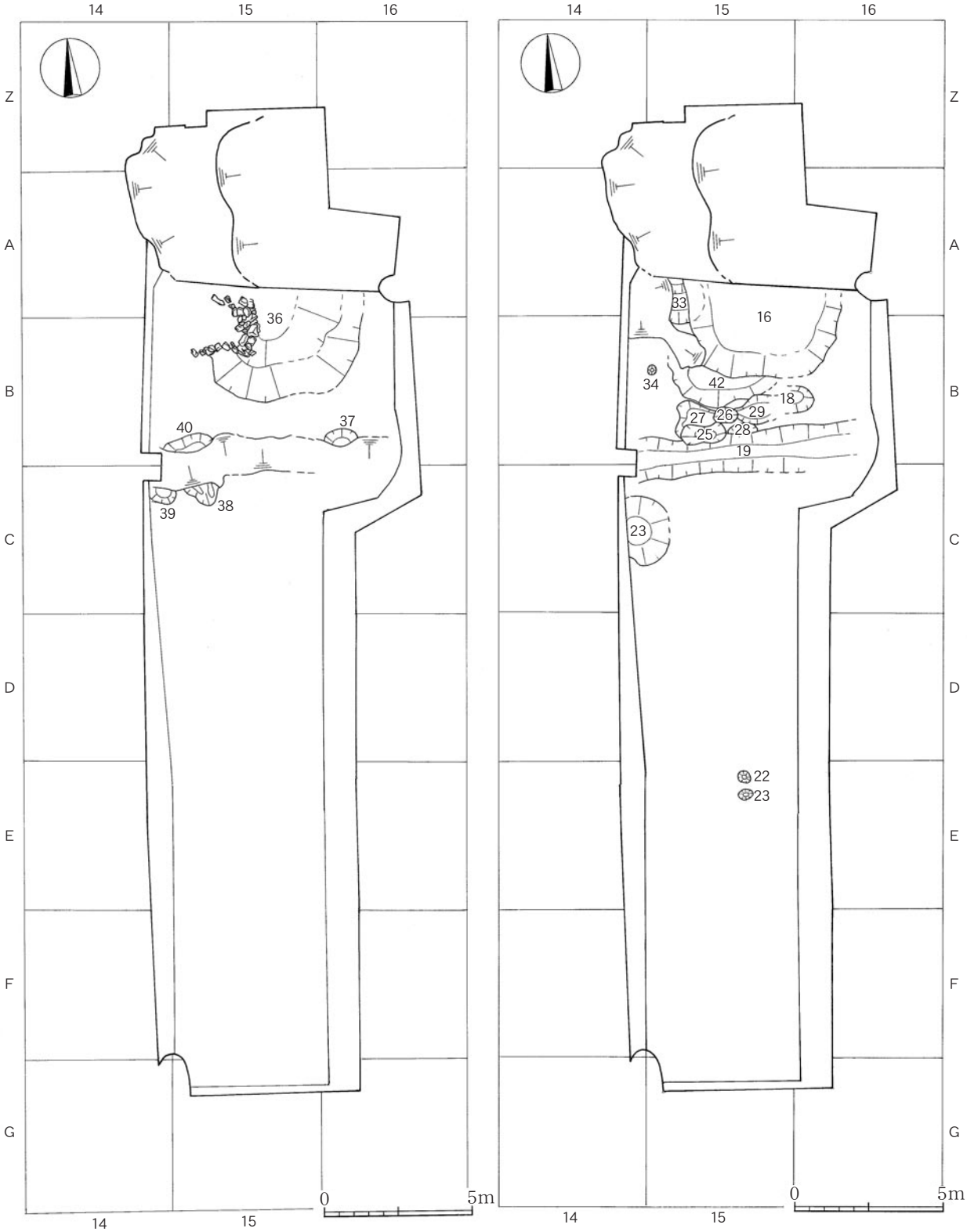
また、遺構らしきものを確認した段階で番号をふったが、その後の精査で遺構ではないと判断されたり、確認のために削ったりして消失したものもある。それに該当するのがＳ30・Ｓ32で、これらは欠番とした。Ｓ31は、当初、土坑と考えたが、整理の段階で暗渠Ｓ17の埋土上層とほぼ同じ土のため、暗渠Ｓ17の延長であり、南側が丸く広がっているのは、暗渠掘削時に肩が崩壊したためであろうと判断された。したがって、Ｓ31も欠番とした。

Ｓ35は、土坑Ｓ15の調査の際に同時に掘ってしまっていて、断面観察によって土坑Ｓ15とは別の遺構であることが判明し、番号を付した遺構である。欠番ではないが、断面図のみを呈示し、次節以降の解説では扱わないことにした。

なお、本報告書刊行前に、遺構・遺物の一部については、すでに以下の報告文を公表しているので、



第８図　遺構配置図(1)（縮尺：１／200）
左：グリッド配置図　右：江戸時代第３遺構面遺構配置図



第９図　遺構配置図(2)（縮尺：１／200）
左：江戸時代第２遺構面遺構配置図　右：江戸時代第１遺構面遺構配置図

第 10 図　遺構配置図(3)（縮尺：１／200）
左：江戸時代第１遺構面上半遺構配置図　右：明治時代水田面遺構配置図

そちらも合わせて参照していただきたい。

定森秀夫「常三島遺跡の船入状遺構」(『四国城下町通信』第10号所収、四国城下町研究会、2002年)。

定森秀夫「常三島遺跡（工学部電気棟地点）出土の土製火鉢･焜炉類」(第５回四国城下町研究会発表要旨・資料集『四国と周辺の土器Ⅱ―火鉢・焜炉類にみる流通と生活形態―』所収、四国城下町研究会、2003年)。

第２節　土　　層

１．土層の概要

発掘調査区の南北方向の土層図に関しては、西壁断面図（第11図、図版第２）と東壁断面図（第12図、図版第２・３）とを作成した。

調査区の西壁は、Ａ区の中心を横切る汚水管より北側が撹乱を受け、Ｄラインより約１ｍ南側では、電気電子棟の南棟基礎によって撹乱を受けていたので、主にＢ・Ｃ区の西壁断面を実測した。水田は、この西壁まで達していないので、西壁断面には水田層は出てこない。面的にもこの部分は遺構が多く、遺構の切り合いが断面にいくつか見られた。北側の素掘り船入状遺構Ｓ41の下で砂を確認し、それは海抜－1.4ｍ強であった。

調査区の東壁は、Ｄ～Ｆ区まで調査区東壁であるが、Ｂ・Ｃ区は東側へやや広がる形であったので、Ｄ～Ｆ区の東壁の延長で断面観察ができるようにして、その断面を実測した。東壁では、水田層が連続して存在し、主にＤ～Ｆ区の間では、水田層下の堆積も単純な堆積を示し、海抜－0.2～－0.3ｍで砂に達する。いっぽう、遺構が多く存在するＢ・Ｃ区では、堆積がやや複雑で、砂も西壁程度の深さまで達するものと思われた。

次に、東西方向の断面図（第13図、図版第３）に関しては、Ｂ区東西（水道管下）・Ｄライン・Ｅライン・Ｆラインに土層観察用の畦を残して、Ｅラインに関しては写真のみ撮影し、その他は実測図を作成した。

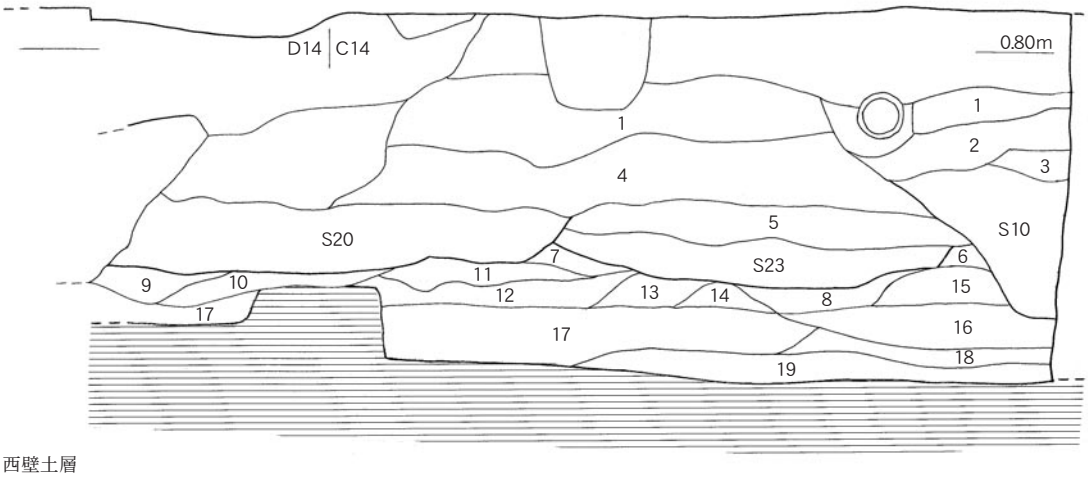
Ｄラインでは、水田層が存在し、東壁Ｄ～Ｆ区と同様な堆積が見られる。Ｆラインの断面でも水田層が存在し、複雑に分層はできたが、堆積は単純なものである。

なお、調査区南方で、山土を利用して整地した部分も確認している。

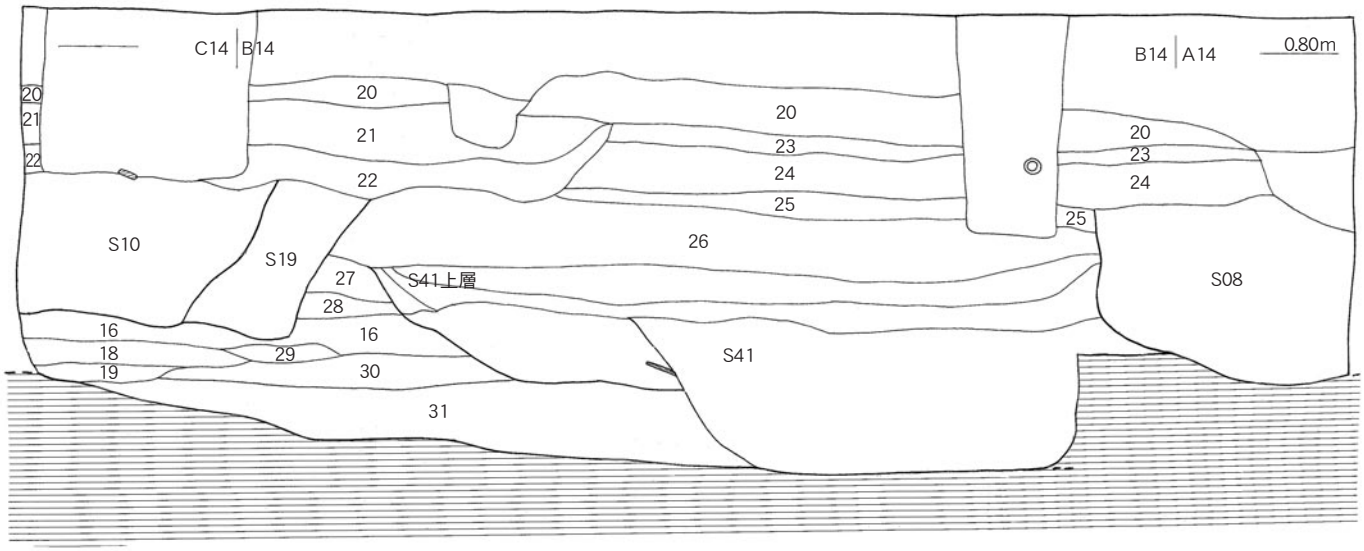
２．包含層出土遺物

遺構出土以外の遺物を、一括して包含層出土遺物として扱った（第14・15図、図版第22)。この中には、本来は遺構に伴うものも含まれるが、遺構出土遺物は遺構の存在を確認して以降のものに限定した。

〔陶器〕第14図 1は、瀬戸・美濃系の碗で、底部・高台・高台内は鉄釉、体部は乳白色を呈する灰釉の掛け分け。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。2は、大谷焼の鉢。高台内に鮮明な墨書がある。漢字ではなく、カタカナの「ツス」であろう。何らかの記号か。幕末前後のもの。3は、大谷焼で、鍋の底部。体部の底部近くに、小粘土塊を貼り付けていて、三足と思われる。底部に明瞭に墨書がみられるが、破片のためごく一部に残るのみで、読解不能である。19世紀代のものである。4は、大谷焼の通い徳利片。刻字の一部が見られ、これまでの出土例から「鮎喰」と思われたが、「魚」と読むには無理がある。「角」ないしは「角」偏の文字と解釈したほうが良かろう。その場合、地名ではなく屋号の可能性が高い。19世紀代のもの。



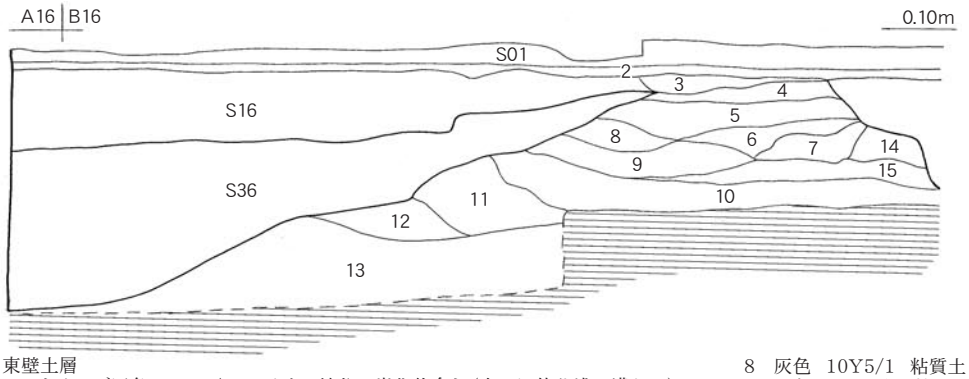
西壁土層
1　オリーブ褐色　2.5Y4/3　直径1～4cm程の礫多量に含む　シルト
2　灰オリーブ色　5Y5/3　直径2～6cm程の礫含む　シルトに灰オリーブ色　5Y6/2　キメの細かいシルト質粘土塊含む　瓦含む
3　オリーブ褐色　2.5Y4/4　やや粘性のあるシルト　瓦含む
4　黄褐色　2.5Y5/3　シルト質粘土(礫少量含む)　炭化物含む
5　黄褐色　2.5Y5/4　シルト質粘土(礫少量含む)　炭化物含む
6　灰オリーブ色　5Y5/2　微砂多量混シルト質粘土
7　黄褐色　2.5Y5/3、灰オリーブ色　5Y5/2　微砂少量混シルト質粘土　鉄分多量に含む
8　灰色　10Y6/1よりやや暗い　鉄分多く全体的にオリーブ褐色2.5Y4/4を呈する
9　灰オリーブ色　7.5Y6/2　微砂少量混粘土　鉄分多量に含む
10　灰オリーブ色　5Y5/3　微砂少量混粘土　鉄分多量に含む
11　オリーブ褐色　2.5Y4/4　細砂　粘土少量含む
12　灰色　7.5Y6/1　微砂極少量混粘土　鉄分多量に含む
13　灰オリーブ色　5Y5/2と灰オリーブ色　5Y5/3の中間色　粘土　鉄分多量に含む
　(基本的には12層と同じ土だが鉄分が多いため色調異なる)
14　基本的には12層と同じ灰色　10Y4/1　細砂含む
15　灰オリーブ色　7.5Y6/2　微砂極少量混粘土　鉄分多量に含む　基本的には12層と同じか？
16　灰色　10Y5/1、灰色　10Y4/1の中間色　微砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分含む
17　灰オリーブ色　7.5Y4/2　細砂
18　灰色　10Y5/1　よりやや暗い　微細砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分含む
19　灰色　10Y5/1　微細砂少量混シルト質粘土　鉄分含む



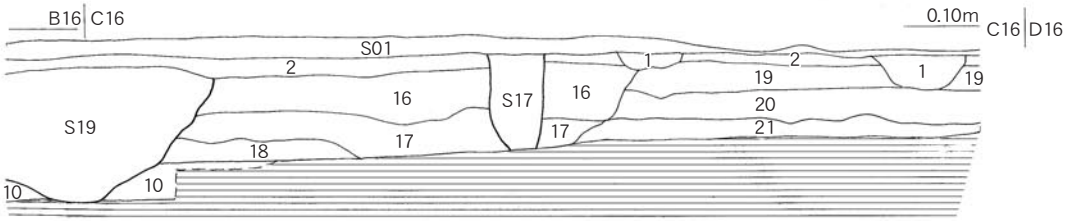
20　オリーブ褐色　2.5Y4/3　礫混シルト
21　にぶい黄褐色　10YR4/3　微砂(極細)礫混シルト質粘土
22　灰色　5Y6/1　シルト質粘土　炭化物含む
23　黄褐色　2.5Y5/3　シルトに灰オリーブ色　5Y6/2　キメの細かいシルト斑状に含む
24　にぶい黄色　2.5Y6/3　シルト質粘土　礫少量含む　炭化物含む
25　24層の土に灰黄色　2.5Y6/2　キメの細かいシルト質粘土斑状に含む
26　黄褐色　2.5Y5/3　シルト　炭化物含む
27　26層の土に灰色　7.5Y6/1　微砂混シルト質粘土　鉄分多量に含む
28　灰色　10Y6/1　微砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分含む
29　灰色　10Y4/1　細砂　鉄分含む
30　灰色　10Y5/1　シルト質粘土　鉄分含む
31　暗オリーブ灰色　2.5GY4/1　微砂混粘土　鉄分含む

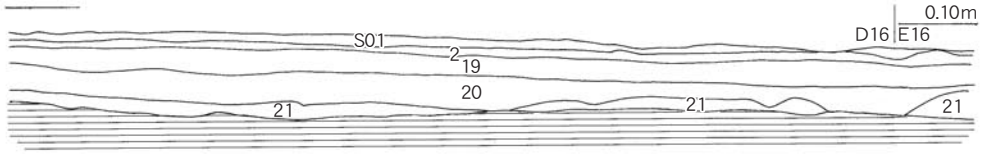
0　2m

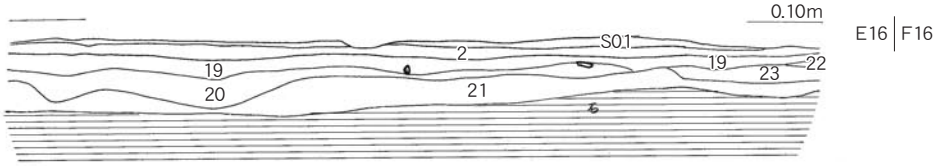
第 11 図　調査区西壁断面図（縮尺：１／40）

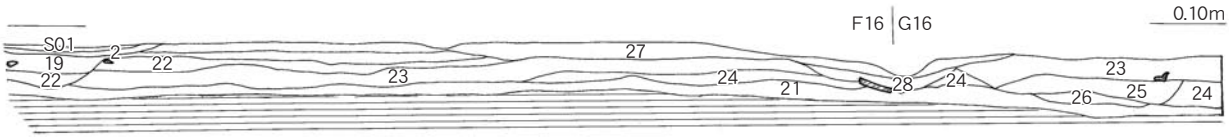


東壁土層
1　オリーブ灰色　10Y4/2　シルト　鉄分、炭化物含む(水田に伴う浅い溝か？)
2　灰オリーブ色　7.5Y5/2　シルト　鉄分多量に沈着(水田の床土にあたる層か？)
3　灰オリーブ色　7.5Y6/1　シルト質粘土　鉄分含む(S18埋土か？)
4　灰色　7.5Y6/1　シルト質粘質土(粗砂混じり)　鉄分含む
5　灰色　10Y6/1　シルト質粘土(砂混じり)　鉄分含む
6　灰色　10Y6/1　粘質土(砂混じり)　鉄分含む
7　灰色　7.5Y6/1　砂質土(粘土混じり)　鉄分含む
8　灰色　10Y5/1　粘質土(砂混じり)　鉄分含む
9　灰色　7.5Y5/1　粘質土(粗砂混じり)　鉄分斑状に含む
10 灰色　7.5Y5/1　粘土　鉄分斑状に含む
11 オリーブ黒色　10Y3/2　粘土(砂混じり)
12 灰色　10Y4/1　粘質土(砂混じり)　炭化物少量含む
13 灰色　10Y4/1　粘性砂質土　有機物少量含む
14 灰白色　7.5Y7/1　シルト質粘土　鉄分含む
15 灰色　7.5Y5/1　シルト質粘土(粗砂混じり)　鉄分含む

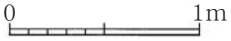




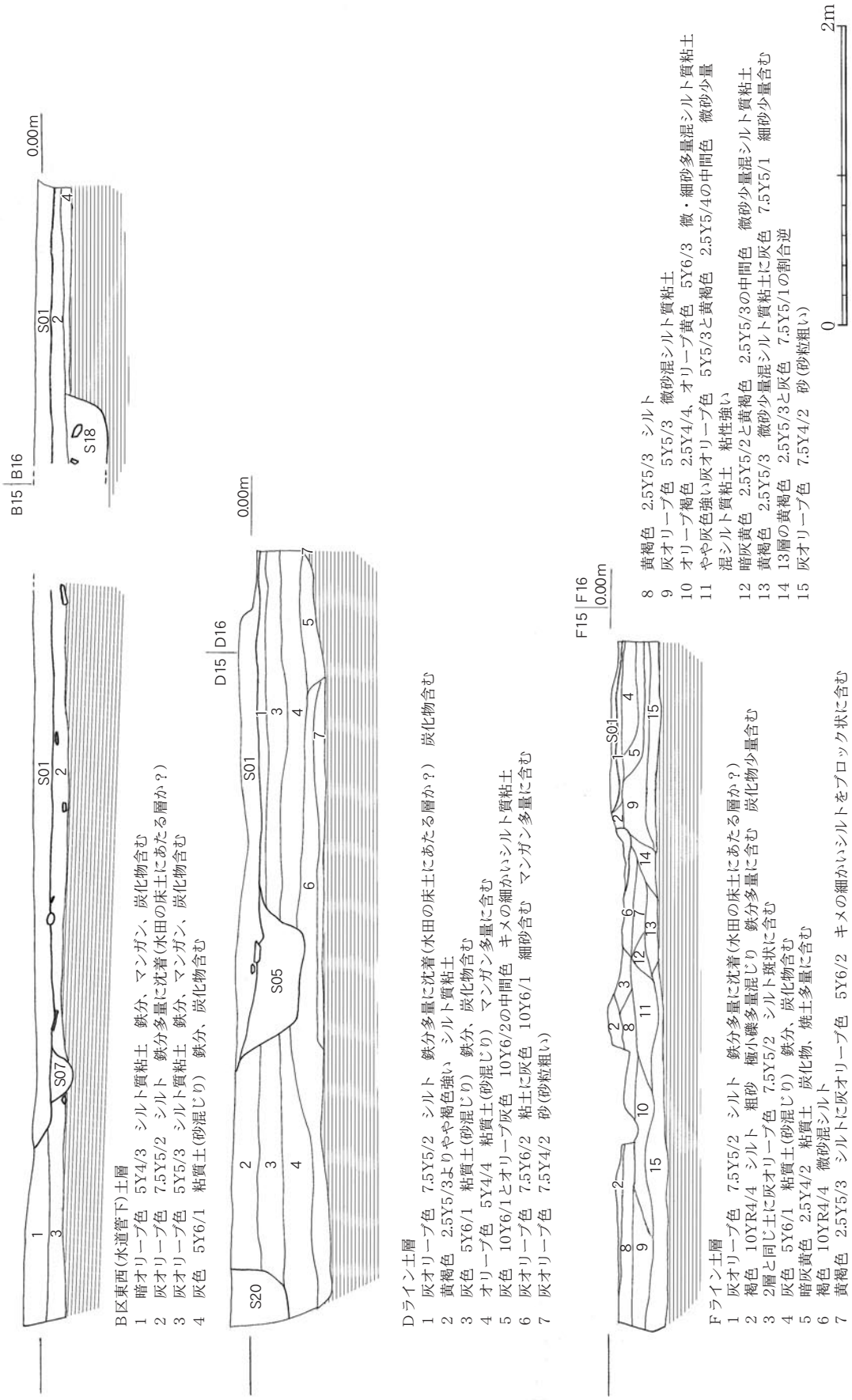




16　黄灰色　2.5Y6/1　シルト(砂混じり)　鉄分含む
17　黄灰色　2.5Y6/1　シルト(粗砂混じり)　鉄分含む
18　灰色　7.5Y6/1　シルト質粘土　鉄分含む
19　灰色　5Y6/1　粘質土(砂混じり)　鉄分、炭化物含む
20　オリーブ色　5Y4/4　粘質土(砂混じり)　鉄分含む
21　灰オリーブ色　7.5Y4/2　砂(砂粒粗い)
22　暗灰黄色　2.5Y4/2　粘質土　炭化物、焼土多量に含む(炭化物の拡がり1/20平面図あり)
23　灰オリーブ色　5Y5/3　粘質土　鉄分、マンガン、炭化物含む　灰色　7.5Y6/1　粘質土をところどころブロック状に含む
24　灰オリーブ色　5Y5/2　粘性砂質土　鉄分含む
25　灰オリーブ色　5Y5/2　砂質土(砂粒粗い)　鉄分含む
26　オリーブ褐色　2.5Y4/3　粘性砂質土(砂粒粗い)　鉄分含む
27　褐色　10YR4/4　シルト(粗砂、極小礫多量混じり)
28　暗灰黄色　2.5Y5/2　シルト質粘土(粗砂、極小礫多量混じり)



第 12 図　調査区東壁断面図（縮尺：１／40）

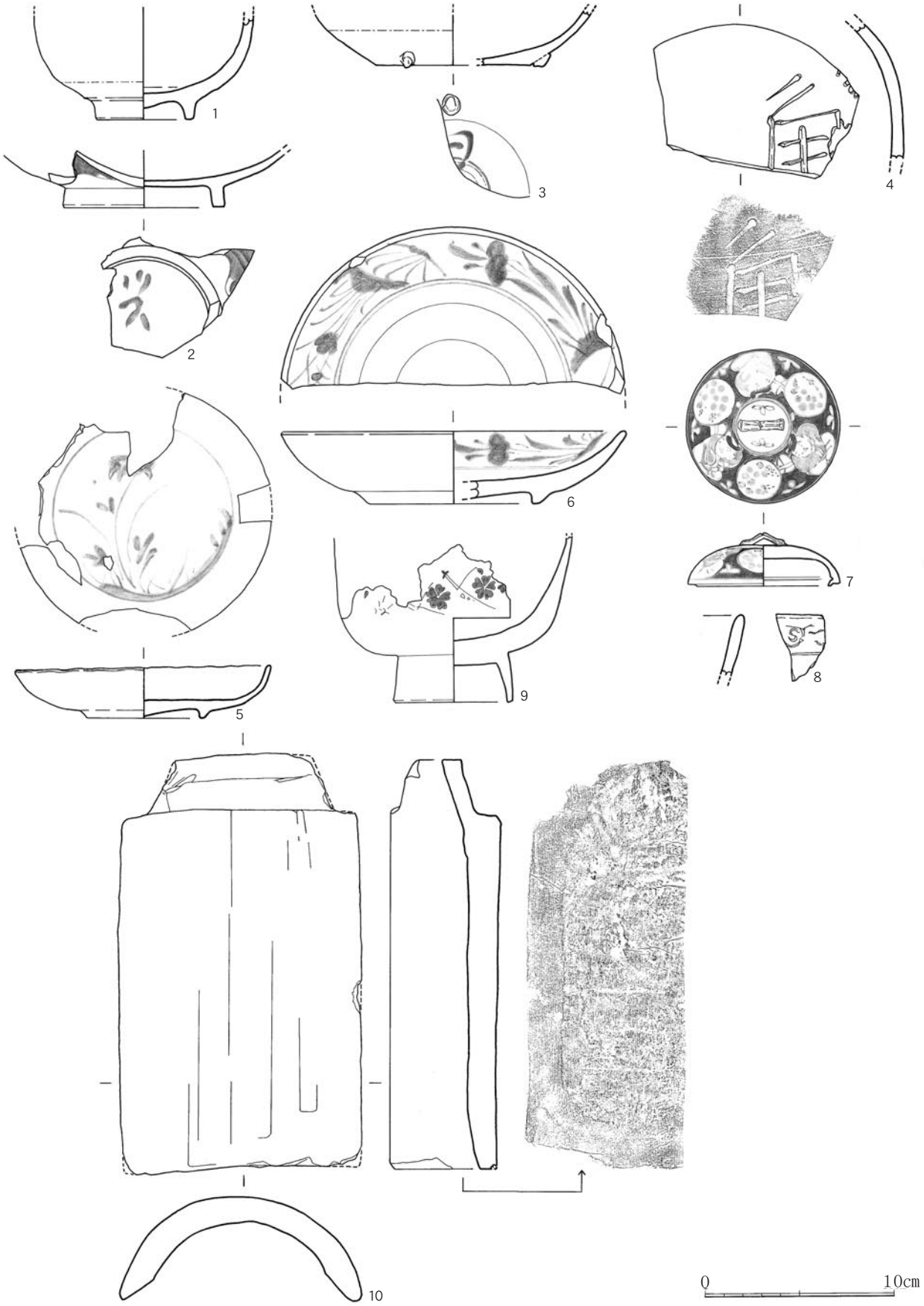


B区東西(水道管下)土層
1　暗オリーブ色　5Y4/3　シルト質粘土　鉄分、マンガン、炭化物含む
2　灰オリーブ色　7.5Y5/2　シルト　鉄分多量に沈着(水田の床土にあたる層か？)
3　灰オリーブ色　5Y5/3　シルト質粘土　鉄分、マンガン、炭化物含む
4　灰色　5Y6/1　粘質土(砂混じり)　鉄分、炭化物含む

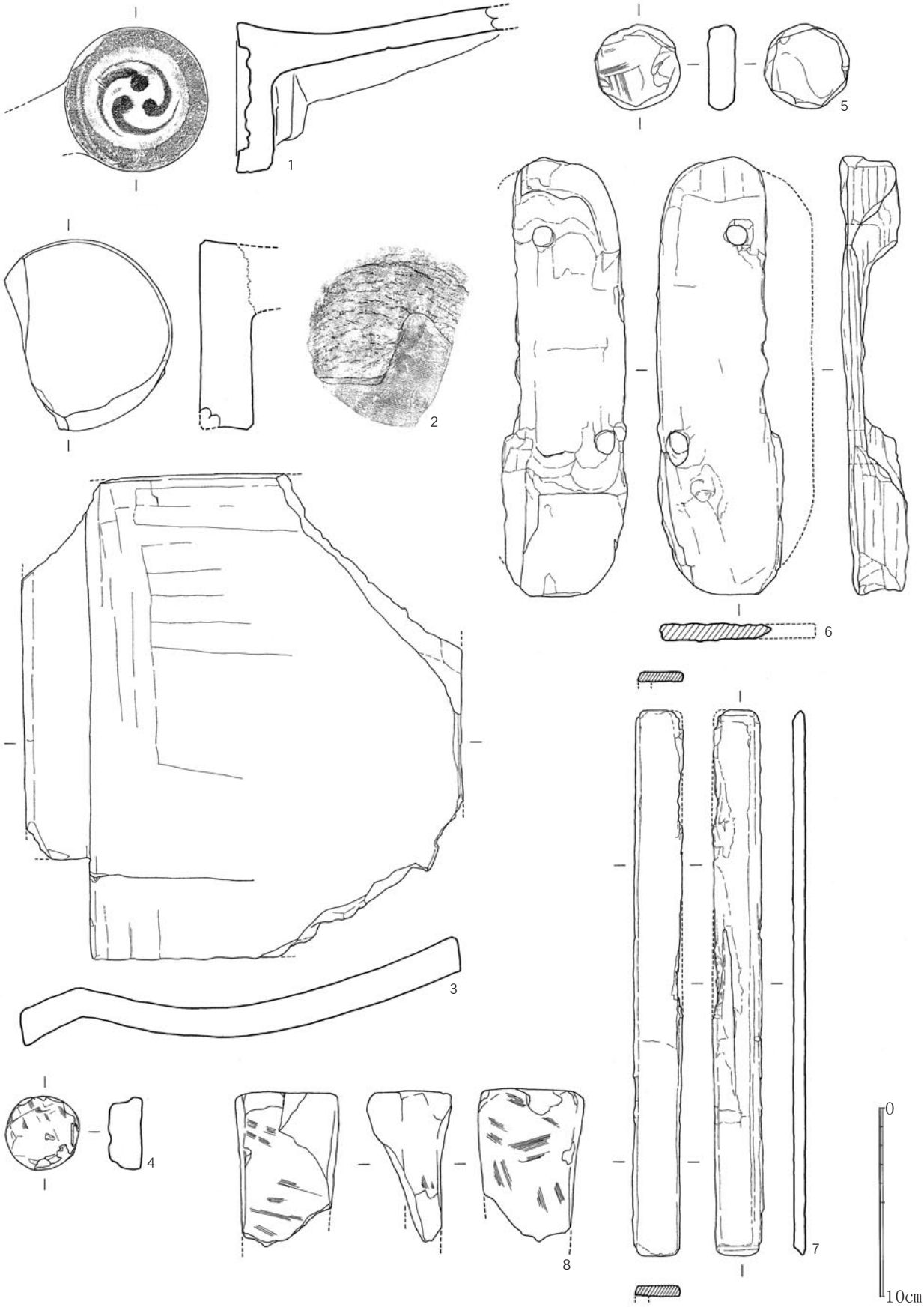
Dライン土層
1　灰オリーブ色　7.5Y5/2　シルト　鉄分多量に沈着(水田の床土にあたる層か？)　炭化物含む
2　黄褐色　2.5Y5/3よりやや褐色強い　シルト質粘土
3　灰色　5Y6/1　粘質土(砂混じり)　鉄分、炭化物含む
4　オリーブ色　5Y4/4　粘質土(砂混じり)　マンガン多量に含む
5　灰色　10Y6/1とオリーブ灰色　10Y6/2の中間色　キメの細かいシルト質粘土
6　灰オリーブ色　7.5Y6/2　粘土に灰色　10Y6/1　細砂含む　マンガン多量に含む
7　灰オリーブ色　7.5Y4/2　砂(砂粒粗い)

Fライン土層
1　灰オリーブ色　7.5Y5/2　シルト　鉄分多量に沈着(水田の床土にあたる層か？)
2　褐色　10YR4/4　シルト　粗砂　極小礫多量混じり　鉄分多量に含む　炭化物少量含む
3　2層と同じ土に灰オリーブ色　7.5Y5/2　シルト斑状に含む
4　灰色　5Y6/1　粘質土(砂混じり)　鉄分、炭化物含む
5　暗灰黄色　2.5Y4/2　粘質土　炭化物、焼土多量に含む
6　褐色　10YR4/4　微砂混シルト
7　黄褐色　2.5Y5/3　シルトに灰オリーブ色　5Y6/2　キメの細かいシルトをブロック状に含む
8　黄褐色　2.5Y5/3　シルト
9　灰オリーブ色　5Y5/3　微砂混シルト質粘土
10　オリーブ褐色　2.5Y4/4、オリーブ黄色　5Y6/3　微・細砂多量混シルト質粘土
11　やや灰色強い灰オリーブ色　5Y5/3と黄褐色　2.5Y5/4の中間色　微砂少量混シルト質粘土　粘性強い
12　暗灰黄色　2.5Y5/2と黄褐色　2.5Y5/3の中間色　微砂少量混シルト質粘土
13　黄褐色　2.5Y5/3　微砂少量混シルト質粘土に灰色　7.5Y5/1　細砂少量含む
14　13層の黄褐色　2.5Y5/3と灰色　7.5Y5/1の割合逆
15　灰オリーブ色　7.5Y4/2　砂(砂粒粗い)

第 13 図　調査区東西断面図(縮尺：1／40)　上：B区東西(水道管下)断面図　中：Dライン断面図　下：Fライン断面図



第 14 図　包含層出土遺物実測図(1)（縮尺：１／３）



第 15 図　包含層出土遺物実測図(2)（縮尺：１／３）

〔磁器〕第 14 図 5 は、全形をうかがうことができる肥前系の皿で、口径 13.6 ㎝、器高 2.8 ㎝。見込みに草花文をあしらう。内面には網目状の筋が見られ、型打ちでつくられたことを物語っている。17 世紀中葉の初期伊万里である。

第 14 図 6 は、肥前系の皿であるが、発色などから見て波佐見系の可能性が高い。見込みは、蛇の目釉剥ぎとなっている。畳付は無釉。18 世紀後半のもの。**7** は、完形の色絵の蓋で、肥前系である。口縁部は無釉。最大径8.0㎝。18 世紀後半から 19 世紀のもの。**8** は、青磁碗の小破片である。外面口縁部に陰刻文が見られ、内外面に貫入が見られる。中国青磁の可能性もあるが、関西系の青磁の可能性が高い。

〔木製品〕第 14 図 9 は、漆器椀である。本遺跡から数点の漆器椀が出土しているが、残存状況が悪く、本例は実測可能な唯一のものであった。内面は朱漆、外面は黒漆で、外面に朱彩の松葉と桜が描かれている。**第 15 図 6** は、一木の刳り下駄である。**7** は、折敷の側板。黒漆が塗られるが、別の板が組み合わさる部分である図の上下と右側の幅６㎜には漆が見られない。

〔瓦〕第 14 図 10 は、丸瓦。内面には布目が残り、外面には長方向に板ナデの痕跡が見られる。

第 15 図 1 は、巴文の軒桟瓦。**2** は、無文の軒桟瓦ないしは軒丸瓦。**3** は、桟瓦。

〔特殊品〕第 15 図 4・5 は、瓦を再利用した加工円盤。

〔石製品〕第 15 図 8 は、砥石。本来の厚さは 4.5 ㎝ほどあったのであろうが、よく使われていて、現存の最も薄い部分は１㎝ほどになっている。

第３節　江戸時代第３遺構面で検出された遺構と遺物

１．素掘り船入状遺構Ｓ 41

１）遺構（第 16 図、図版第４）

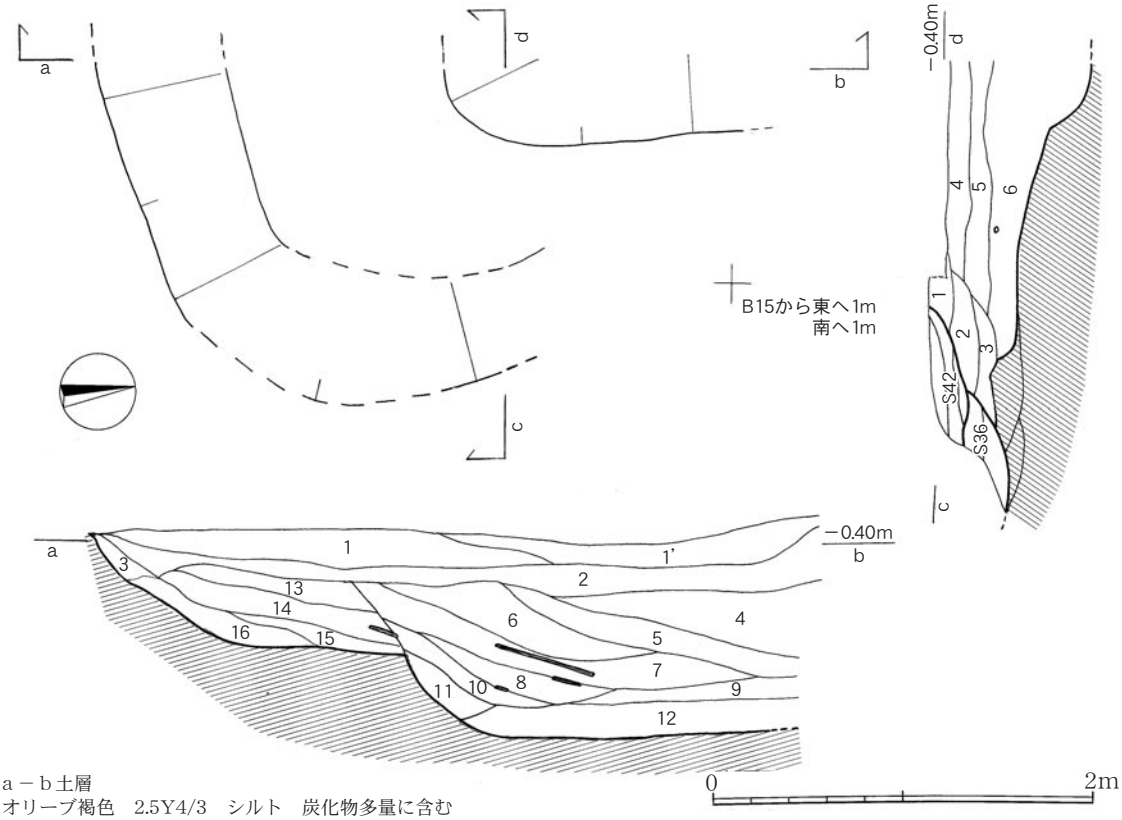
調査終了予定日が迫ってきたため、調査区西側壁面土層図を作成するのに該当部を断ち割りしたところ、その断面に北側へ向かって掘り込まれた遺構を確認した。その下層は有機質を含んだ黒褐色粘質土であり、石組み船入状遺構Ｓ 36 の下層に見られた粘質土と性格が似ていると判断し、石組み船入状遺構Ｓ 36 と同様に水が貯まっていたものと推定した。

この遺構を平面的に追究したところ、面的にも遺構であることを確認した。ただし、この遺構は平面的には東側部のごく一部を確認したのみで、遺構のほとんどは発掘調査区外であった。したがって、遺構の全体像は不明である。しかし、石組み船入状遺構Ｓ 36 との関係で言えば、層位的に確実にその下に位置していることを確認した。

以上のように、水が貯まっていたという状況、石組み船入状遺構Ｓ 36 とそれほど離れていない位置、石組み船入状遺構Ｓ 36 より層位的に下であることなどから、初期船置所に関連する遺構と判断した。

出土遺物は、深掘りした部分からほとんどのものが出土しているが、雨によって西壁が崩落し、ともかく遺物だけでも採集しておくために、崩落土内遺物もこの遺構のものとして取り上げている。特に、下層のものと判断されたものは「最下層」として採集している。このような状況なので、遺物の取り上げの際に上層の遺物も混入している可能性が非常に高い。

このうち、19 世紀の遺物は取り上げ方に不都合があったと思われる。上層（第 16 図、ａ－ｂ断面の１・1’・２・３）出土遺物は 17 世紀後半から 18 世紀初のものがある。下層は、土師皿を除くと、17 世紀中葉のものである。土師皿を 17 世紀後半代の早い時期にみれば、それほど陶磁器とズレはなくな



S41ａ－ｂ土層
1　オリーブ褐色　2.5Y4/3　シルト　炭化物多量に含む
1’１層と同じ　炭化物ほとんど含まない
2　灰オリーブ色　7.5Y5/2よりやや暗い　微砂少量混シルト質粘土　礫少量含む　炭化物多量に含む　鉄分含む
3　灰オリーブ色　5Y5/2よりややオリーブ色強い　微砂少量混シルト質粘土　鉄分含む
4　暗オリーブ灰色　2.5GY4/1　微砂多量混粘土　鉄分含む：整地層
5　オリーブ黒色　7.5Y3/1　微砂多量混粘土(粘性強い)　炭化物、有機物、遺物多量に含む：有機物層
6　灰色　7.5Y5/1、灰色7.5Y4/1　微砂混粘土　炭化物、鉄分含む：整地層
7　灰色　5Y4/1、オリーブ黒色　5Y3/1　微砂混粘土(粘性強い)　灰色　10Y5/1　きめの細かいシルト質粘土少量斑状に含む
炭化物、有機物、遺物多い　礫含む：有機物層
8　オリーブ黒色　7.5Y3/1　微砂多量混粘土(粘性強い)　炭化物、有機物、遺物多量に含む　礫含む：有機物層
9　灰色　5Y4/1　粘土(粘性強い)　有機物少量含む：有機物層
10　灰色　5Y4/1　微砂多量混粘土(粘性強い)に灰色　10Y5/1　微砂混粘土少量含む　炭化物、有機物、遺物多量に含む　礫含む：有機物層
11　10層の灰色　5Y4/1　微砂多量混粘土(粘性強い)と灰色　10Y5/1　微砂混粘土の土の割合逆　炭化物、有機物、遺物含む：有機物層
12　灰色　7.5Y4/1、灰オリーブ色　5Y4/2　微砂少量混粘土(粘性強い)　木片含む：有機物層
13　灰色　10Y4/1、灰色　10Y5/1の中間色　微砂混シルト質粘土　炭化物含む：整地層
14　灰色　7.5Y4/1　微砂混粘土　炭化物、有機物含む：有機物層
15　灰色　7.5Y5/1　微砂ごく少量混粘土に14層の土　少量含む
16　灰色　10Y5/1　微砂ごく少量混シルト質粘土

S41ｃ－ｄ土層
1　灰色　7.5Y5/1　シルト質粘土　鉄分沈着：整地層
2　灰色　10Y5/1　粘土に灰オリーブ色　7.5Y5/2　微砂含む：有機物層
3　灰色　10Y4/1　微砂多量混粘土：有機物層
4　オリーブ褐色　2.5Y4/3　シルト　鉄分多量に含む　炭化物含む：有機物層
5　灰色　7.5Y5/1　微砂混シルト質粘土　炭化物含む：有機物層
6　灰色　7.5Y4/1　微砂混粘土　炭化物含む：有機物層

第 16 図　素掘り船入状遺構Ｓ 41 実測図（縮尺：１／40）

る。また、土師皿も１点ではあるが、17 世紀前半に遡るものがある。したがって、下層は 17 世紀中頃のものがほとんどで、この遺構こそが江戸初期の船置所関連の船入状遺構ではないかと考えられた。しかし、上層の遺物は 17 世紀後半から 18 世紀初であり、また石組み船入状遺構とのレベルから考えると、上層は本遺構とは全く別個で、包含層ないしは別の遺構であったと思われる。

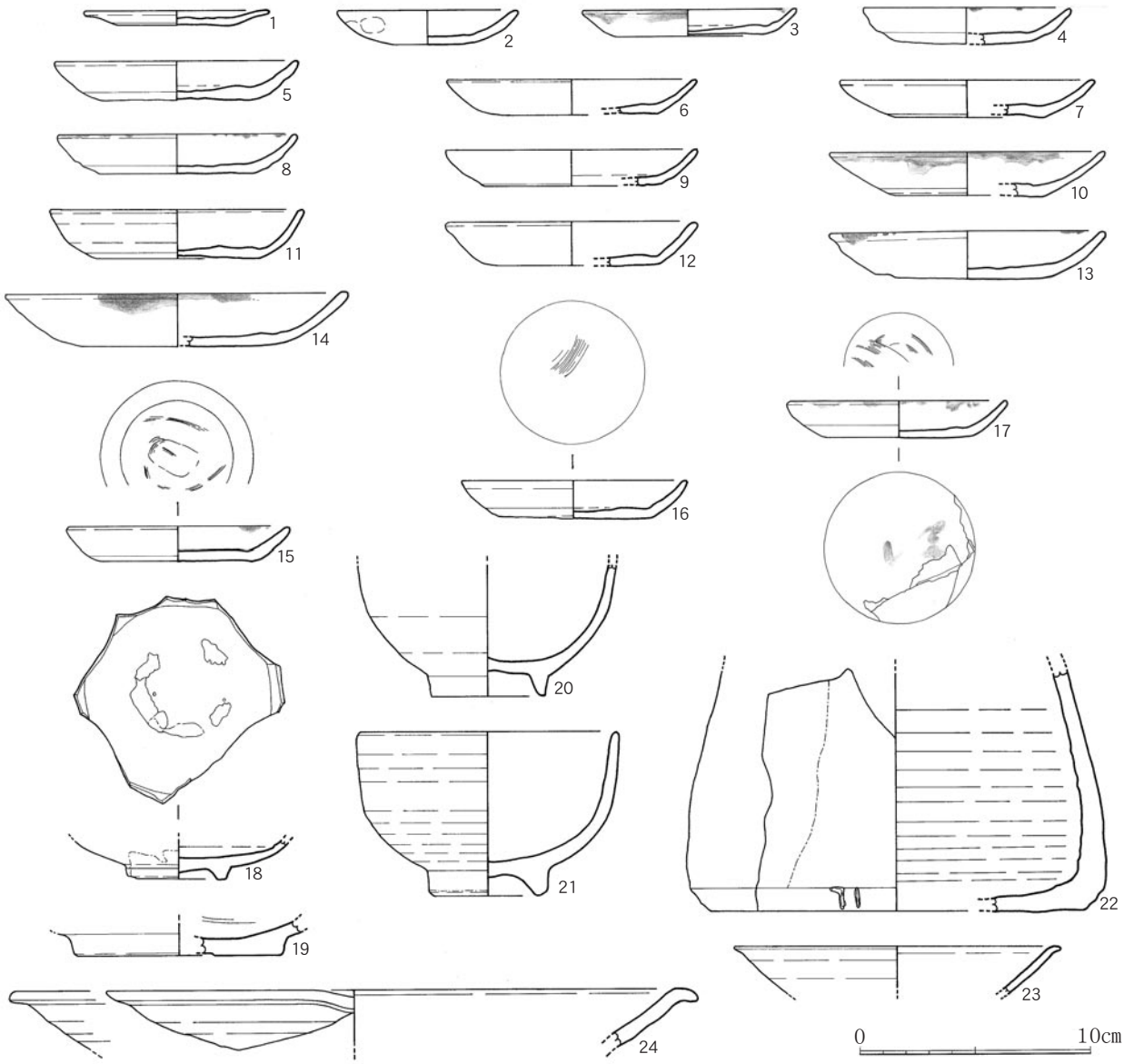
したがって、下層出土のものを基本にその他の遺物を参照すれば、本遺構は 17 世紀前半～中葉の時期に推定が可能と思われる。

２）**出土遺物**（第17・18図、図版第23・24）

〔土師器〕第17図１～17は、土師皿。第２表に、それぞれの口径と器高などをまとめておいたので、参照していただきたい。１は、上層出土で、器高が低く、18世紀前半に入る。他の土師皿はすべて17世紀代なので、これはＳ41本体とは切り離して見た方が良かろう。２は、崩落土内の最下層に相当する部分からの採集。手捏ねである。17世紀前半のもの。それ以外は、底部糸切りで板目状圧痕が有るものと無いものとがあり、17世紀中頃から後半代。17の底部には、墨書が見られるが、解読不能である。

３・５・７は、下層出土。４・６・８・12・13・15・17は、崩落土内の最下層に相当する部分からの採集。９・11・16は、上層出土。10・14は、層位不明。

〔陶器〕第17図18は、唐津の皿。崩落土内の上層に相当する部分から採集。見込みと畳付に砂目跡がある。17世紀前半。19は、肥前系の火入か香炉の底部。崩落土内の最下層に相当する部分からの採集。17世紀後半以降のもの。20は、肥前系の碗。下層出土。畳付のみ無釉。17世紀中葉のもの。



第17図　素掘り船入状遺構Ｓ41出土遺物実測図(1)（縮尺：１／３）

第２表　素掘り船入状遺構Ｓ 41 出土土師皿法量表

第 17 図	口径(㎜)	器高(㎜)	備　　考
1	80	6	底部：回転糸切り
2	79	15	手捏ね
3	92	16	底部：回転糸切り後板目状圧痕　　口縁端部に煤有り
4	90	16	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り
5	104	17	底部：回転糸切り
6	109	16	底部：回転糸切り後板目状圧痕
7	110	16	底部：回転糸切り後不明
8	104	17	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り
9	110	15	底部：回転糸切り後不明
10	118	20	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り
11	108	21	底部：回転糸切り後板目状圧痕
12	110	19	底部：回転糸切り後板目状圧痕
13	119	21	底部：回転糸切り後板目状圧痕　　口縁端部に煤有り
14	148	22	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り
15	97	15	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り
16	98	17	底部：回転糸切り後板目状圧痕
17	95	16	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り　　墨書有り（文字不明）

第 17 図 21 は、肥前系の呉器手碗。崩落土内の最下層に相当する部分から採集。畳付のみ無釉。17 世紀後半。**22** は、備前の水指。底部近くに窯印がある。17 世紀前半のもの。**23** は、唐津の皿。下層出土。砂目皿か。17 世紀中葉のもの。**24** は、唐津の鉢。下層出土。23 と同じく 17 世紀中葉のもの。

〔磁器〕第 18 図 1 は、初期伊万里の皿。崩落土内の最下層から採集。口径 13.6 ㎝、器高 3.6 ㎝で、高台内施釉。畳付は無釉。見込みに椿文を描き、周囲に花文を配する。17 世紀中葉のもの。 **2** は、肥前系あるいは関西系の碗。崩落土内の最下層に相当する部分から採集。幅広の高台で、畳付は釉剥ぎ。19 世紀代のもので、採集時に混入したものと思われる。 **3** は、肥前系の染付碗。上層出土。17 世紀末のもの。**4** は、肥前系の白磁で、蓋物か壺の蓋であろう。崩落土内の最下層に相当する部分から採集。17 世紀末。**5** は、鎬を入れた初期伊万里の小杯。17 世紀中葉のもの。

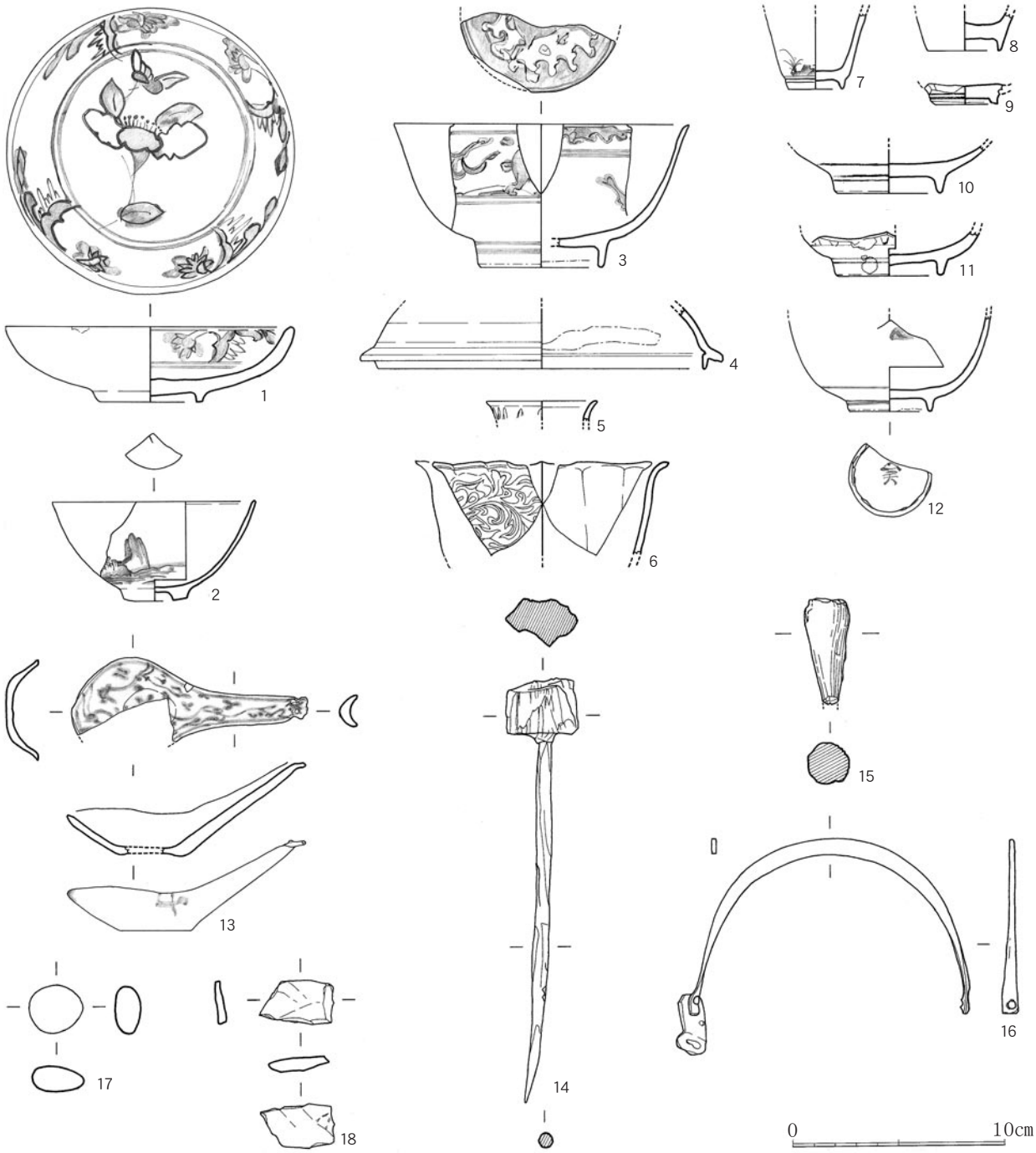
第 18 図 6 は、肥前系の白磁向付。型打ちで、唐草文を浮き上がらせる。19 世紀代で、混入品と考えたい。 **7** は、肥前系の小杯ないしは猪口。上層出土。外面に草花文。17 世紀末から 18 世紀初か。 **8** は、肥前系の白磁猪口ないしは小杯。上層出土。17 世紀後半のものか。 **9** は、関西系と思われる染付小杯ないしは猪口。高台が幅広で畳付から高台内は無釉。19 世紀代。これはＳ 41 上面からの出土であるので、前述したように上層出土の 19 世紀代の時期のものは、もともとはＳ 41 の上に載る包含層からの出土品と考えられる。**10** は、肥前系の染付碗。上層出土。17 世紀末から 18 世紀初のもの。

第 18 図 11 は、肥前系の染付碗。外面に網目文を施す。畳付に砂が付着する。17 世紀後半のもの。**12** は、肥前系の染付碗。崩落土内の最下層に相当する部分からの採集。高台内には「八」記号の下に変形文字の銘款がある。畳付に砂が付着する。17 世紀末。**13** は、肥前系の染付蓮華。崩落土内の最下層に相当する部分からの採集。内面に花唐草文。19 世紀代のものと思われ、混入品であろう。

〔木製品〕第 18 図 14 は、釘様の形態をしているが、用途不明。崩落土内から採集。**15** は、栓。下層出土。

〔金属製品〕第 18 図 16 は、弦。

〔石製品〕第 18 図 17 は、黒石であるが、形がやや不整形なので、自然石あるいはおはじきか。下層出土。**18** は、石英製の火打石。下層出土。



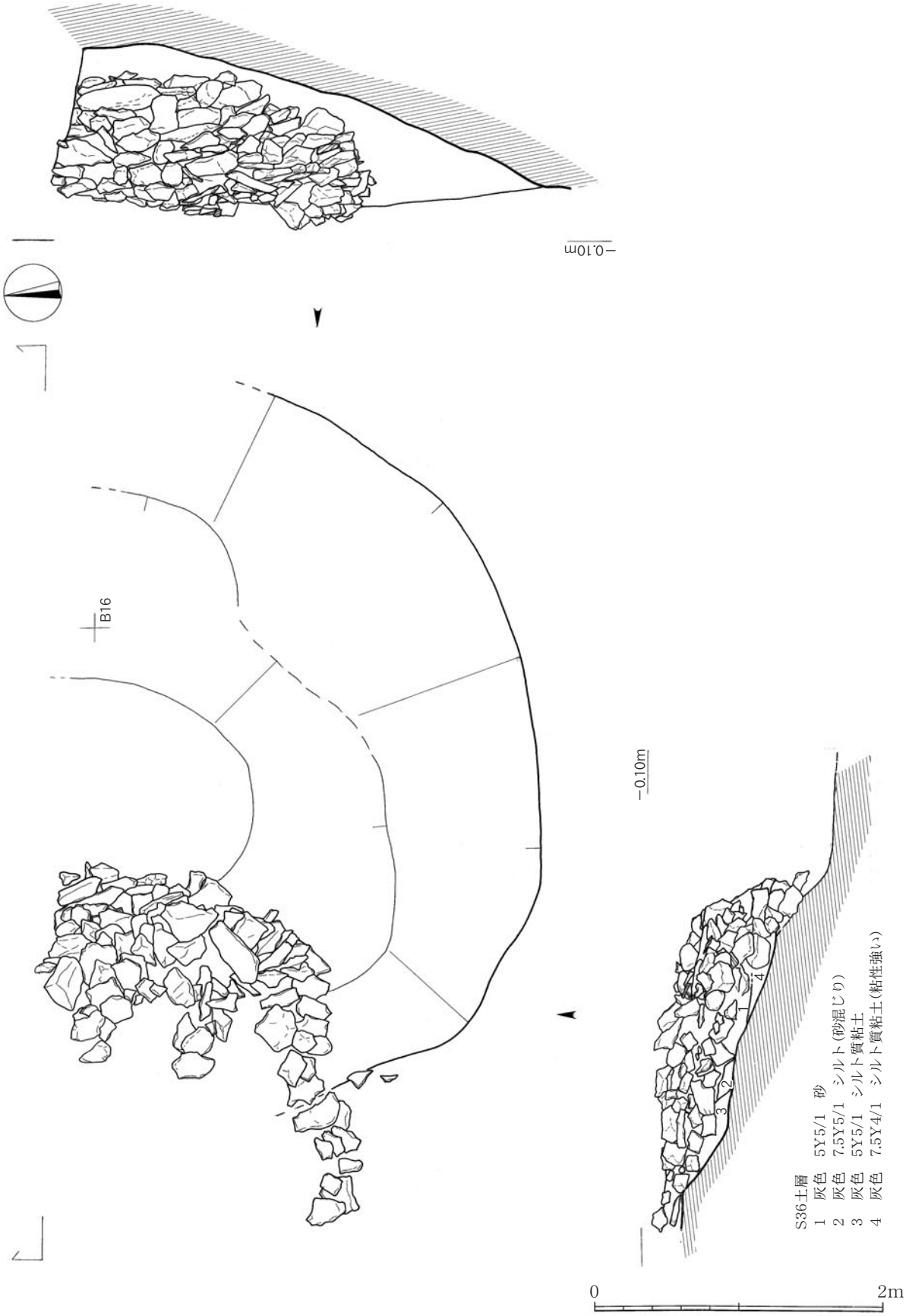
第 18 図　素掘り船入状遺構Ｓ 41 出土遺物実測図(2)（縮尺：１／３）

第４節　江戸時代第２遺構面で検出された遺構と遺物

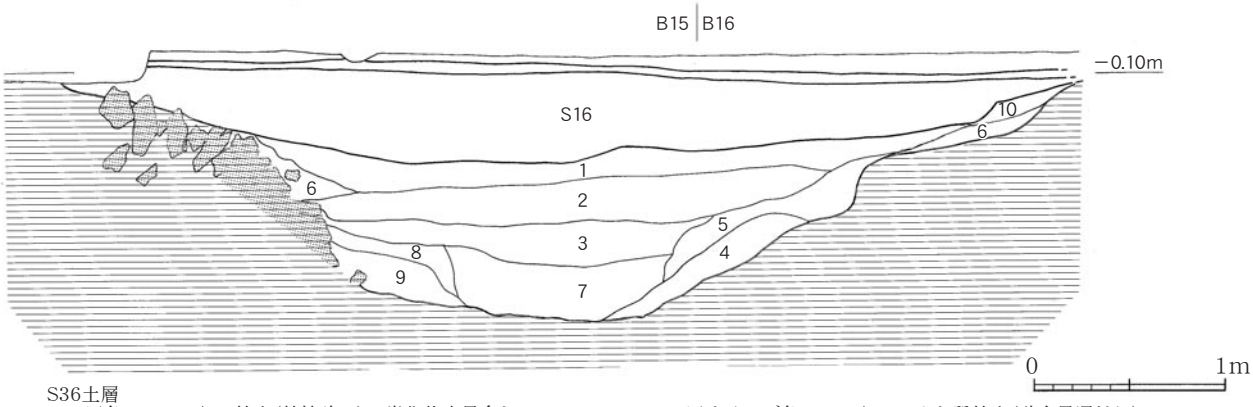
１．石組み船入状遺構Ｓ 36

１）遺構（第 19・20 図、図版第５・６・７－１）

水道管埋設時の掘り方内（撹乱部）に石が頭を見せていたが、当初は何であるのか全く推測できなかった。土坑Ｓ 16 を掘りあげた時点で、この石がある程度集中することを確認し、何らかの重要な遺構になるだろうと思われた。



第 19 図　石組み船入状遺構Ｓ 36 実測図（縮尺：１／40）



S36土層
1　灰色　7.5Y5/1　粘土(粘性強い)　炭化物少量含む
2　灰色　5Y5/1　粘土(粘性強い)
3　オリーブ黒色　5Y3/2　粘質土(砂混じり)　炭化物少量含む
4　オリーブ黒色　7.5Y3/1　砂(粘土混じり)
5　灰色　10Y4/1　砂(粘土混じり)　4層より粘土の割合増える
6　灰オリーブ色　5Y4/2　シルト質粘土(砂多量混じり)
7　オリーブ黒色　5Y3/1　粘土(砂混じり)
8　オリーブ黒色　7.5Y3/1　粘土(砂多量混じり)
9　黒色　7.5Y2/1　粘土(細砂混じり)
10　灰色　7.5Y5/1　シルト(砂混じり)　鉄分含む

第20図　石組み船入状遺構Ｓ36断面図（縮尺：１／40）

調査終了予定日が近くなり、残された時間が少なくなってきたので、上から石を追いかけて遺構を検出していくことにし、最終的に石組み遺構になることを確認した。この石組み遺構の東側には埋土が黒褐色粘質土の掘り込み部が位置する。これらを合わせてＳ36とし、このＳ36は西側に石組みを有する船入状遺構ではないかと推測できるようになった。

石組は西側から少しずつ深くなり、南東部で丸く弧を描いて北側へ延びていくが、汚水管以北は確認できなかった。調査終了後、北側地区を再度重機で掘削する際に立会い調査を行った。しかし、撹乱が甚だしく、汚水管以北に関しては、現状では石組み遺構の続きを確認することはできなかった。

石組み遺構の石材は緑泥片岩がほとんどであるが、砂岩質の川原石も若干使用されていた。石組み遺構は、東側からの見通しでは約1.1ｍの高さであった。石積みは、決して丁寧に積み上げられたと言うべきものではないが、おそらく多少の圧力で変形している可能性もある。第20図の断面をみると、若干雁木状に見えないこともない。石組み遺構を有する船入の東西幅は、東側はその端を確認できていないが、５ｍ以上はあったものと考えられる。

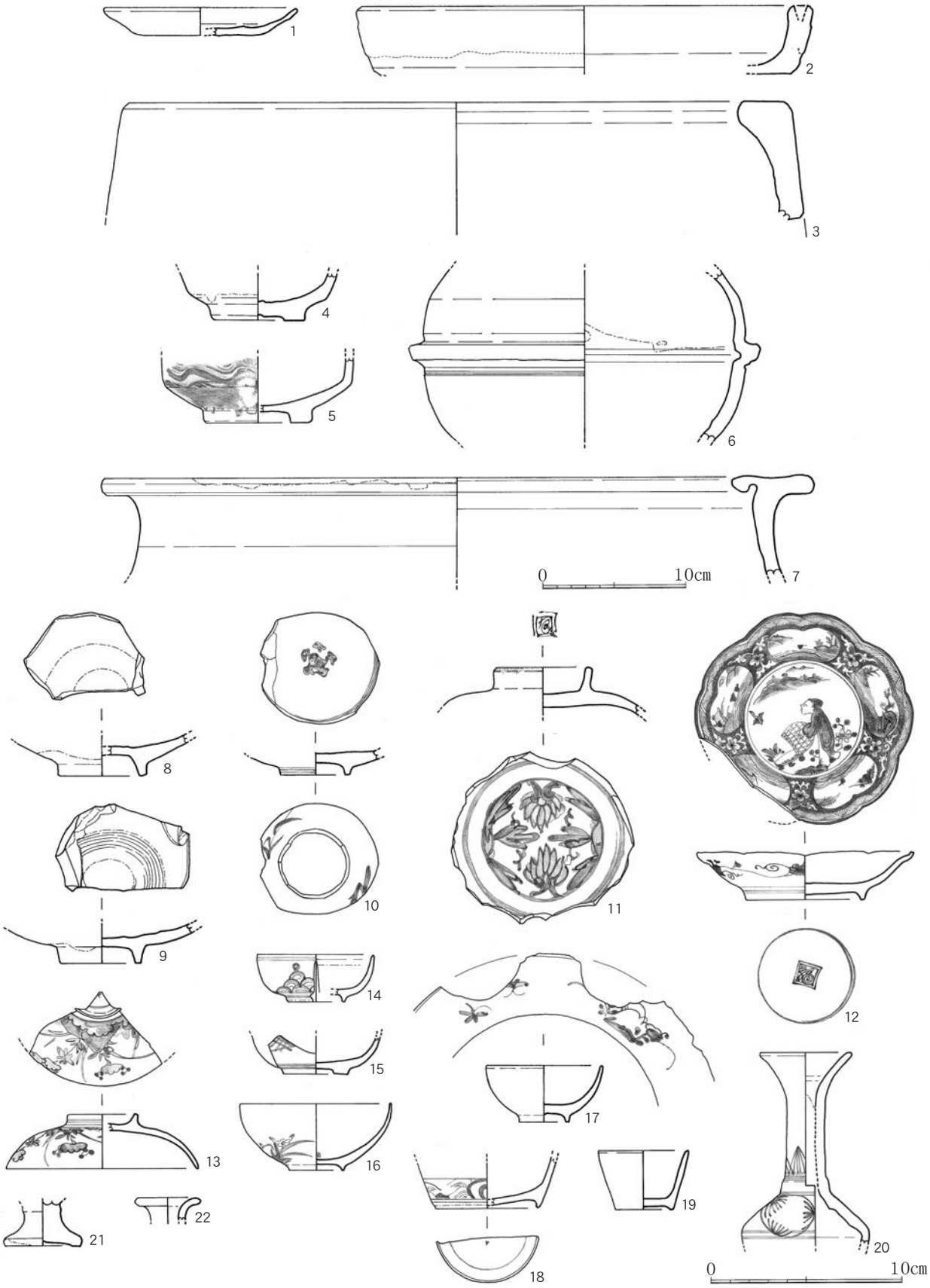
さらに、船入状遺構と見る根拠は、Ｓ36の石組み東側で垂直に突き刺さった竹杭を検出したことである（図版第７－１）。調査進行上、図面を作成する余裕がなく、写真のみの記録となってしまったが、この竹杭は船を係留するためのものと考えられる。

この石組み船入状遺構を、当初は、安宅島に置かれた徳島藩の初期船置所関連の遺構と考えていたが、出土遺物が17世紀後半代以降のものに限られるため、その可能性はないものと判断された。

２）**出土遺物**（第21～23図、図版第25）

〔土師器〕第21図１は、土師皿で、底部は回転糸切り後、板目状圧痕が見られる。２は、関西系炮烙で、口縁端部に穿孔がある。３は、復元口径35㎝の焜炉になると思われる口縁部破片。日下分類（日下正剛「徳島城下町出土の土製火鉢・焜炉類」『論集徳島の考古学』、2002年）のⅡＣ類である。口縁端部は両側が面取りされている。外面から平坦面および内面の面取り部に丁寧なミガキが施される。内面はヨコナデ。外面には赤彩が施され、内面と平坦面に若干の煤が見られる。

〔陶器〕第21図４は、肥前系の陶胎染付の火入。内面・底部・蛇の目高台は無釉で、茶褐色を呈する。18世紀後半～19世紀である。これは、石組み西側に設定した南北トレンチ内から出土。５は、肥前系の火入。内面無釉で、外面には刷毛目装飾が見られる。17世紀後半から18世紀前半にかけてのもの。



第21図　石組み船入状遺構Ｓ36出土遺物実測図(1)（縮尺：１／３）　７は縮尺：１／４

第21図6は、産地不明の土瓶と思われる。外面上半には鉄釉をかけ、内面下半には鉄釉を塗っている。外面下半には煤が付着している。19世紀代。壁の崩落土から採集したものなので、確実にＳ36に伴うものとは見られない。**7**は、肥前系の大甕口縁部。

〔磁器〕第21図8は、肥前系の青磁皿。底部・高台は無釉である。発色は非常に淡い緑色で、白磁に近い色合いである。見込みは蛇の目釉剥ぎされる。17世紀後半から18世紀前半かけてのもの。**9**も肥前系の青磁皿。やや淡い緑色の発色。高台は無釉で、畳付に砂が付着する。見込みは蛇の目釉剥ぎである。17世紀後半以降のものである。これは、前述の第21図４と同じく南北トレンチより出土している。**10**は、肥前系の筒形碗の底部片。見込みに五弁花文のコンニャク印判が押される。18世紀後半のもの。

第21図11は、肥前系の青磁染付の碗蓋。畳付は無釉で、砂が付着する。見込みには花文、高台内には二重方形枠内に「渦福」の銘が描かれる。18世紀中葉のもの。**12**は、肥前系の染付輪花皿。見込みに人物図、周囲に山水図五景を描き、口縁端部は鉄錆を塗った口紅装飾。外面には唐草文を巡らし、高台内には圏線と二重方形枠内に「渦福」の銘を描く。畳付は無釉。17世紀末から18世紀初にかけてのもの。**13**は、肥前系の丸碗の蓋。外面に草花文を描く。18世紀中葉から後半のもの。**14**は、肥前系の小型蓋物の身と思われる。内面口縁部には釉がかかっていない。外面には青海波文が部分的に描かれる。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**15**は、肥前系の碗か蓋物底部。外面に斜格子文を描き、幅広の高台。18世紀後半のもの。

第21図16は、肥前系の半球碗形の小杯。外面に草花文を描く。18世紀中葉のもの。**17**は、肥前系の小杯。外面に草花文を配する。18世紀中葉から後半にかけてのもの。**18**は、肥前系の猪口。外面底部に区画された青海波と渦巻きの文様が見られる。高台内には圏線と五弁花が描かれていたようである。18世紀代。**19**は、肥前系の白磁小杯。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**20**は、肥前系の仏花瓶。頸部下方でやや段となる。頸部下方に竹文、肩部に松葉文を描き込んだ丸文を三方に配す。内面にはシボリ痕が明瞭に見られる。18世紀後半のもの。

第21図21は、肥前系の仏飯器。17世紀末から18世紀にかけてのもの。**22**は、肥前系の瓶類の口縁部。

〔木製品〕第22図7は長方形の加工品で、一角が斜めに切られている。用途不明。

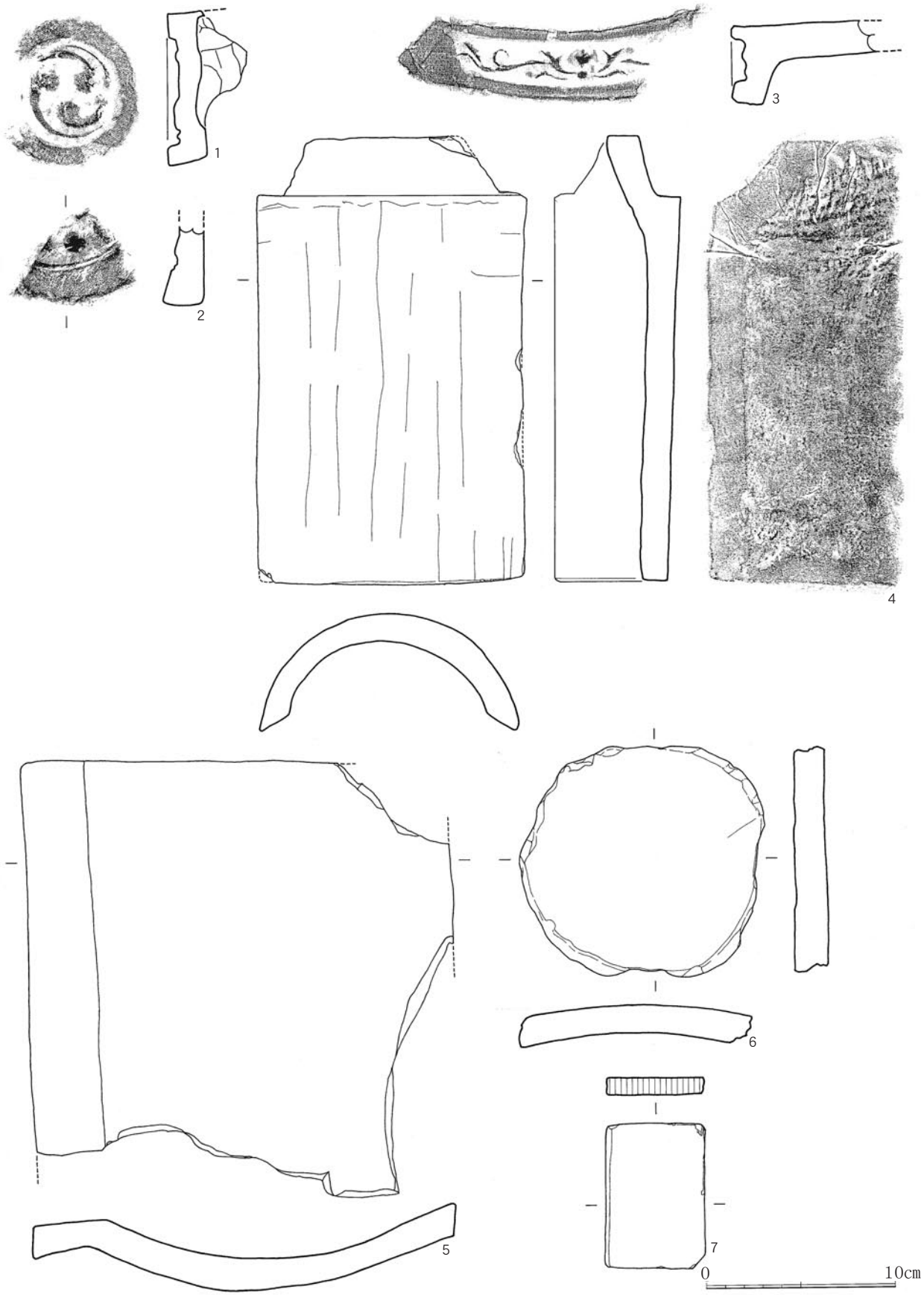
〔瓦〕第22図1は、軒桟瓦の軒丸部で、巴文。**2**は、巴文軒丸瓦。焼成は甘く、淡褐色を呈する。**3**は、軒桟瓦の軒平部。**4**は、丸瓦で、内面に布目。**5**は、桟瓦。

〔特殊品〕第22図6は、桟瓦ないしは平瓦を打ち欠いて作る加工円盤の未成品。この大きさ程度で完成すると、かなり大型の円盤になるが、その際には、円盤自体が多少湾曲していることになる。あるいは、さらに打ち欠いていき、小型の円盤にする途中なのであろうか。

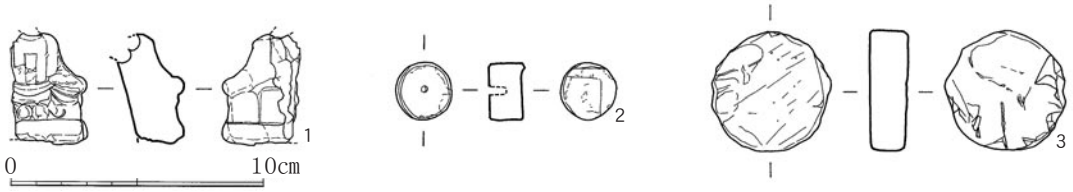
第23図1は、学問の神様菅原道真をモチーフにした天神の土人形。底部から胸部にかけて、かなり大きな空洞部を設けている。**2**は、真鍮製の棒状のものを切断している。切断面には、完全に切断する手前で止めて、折って分割したことを示す痕跡が残る。切断面と反対の面は、本来の形状で、周囲の１㎜は一段低くなり、中心には、直径３㎜の孔が深さ７㎜ほどあけられている。**3**は、瓦を再利用した加工円盤。

２．土坑Ｓ37（第24図、図版第７－２・３）

第１遺構面で検出された溝Ｓ19によって、本遺構の南側部分は切られている。現状で東西1.2ｍほど、深さ８㎝ほどの浅い土坑である。遺物は出土していない。



第 22 図　石組み船入状遺構Ｓ 36 出土遺物実測図(2)（縮尺：１／３）



第23図　石組み船入状遺構Ｓ 36 出土遺物実測図(3)（縮尺：１／３）

３．土坑Ｓ 38（第24図、図版第７－４・５）

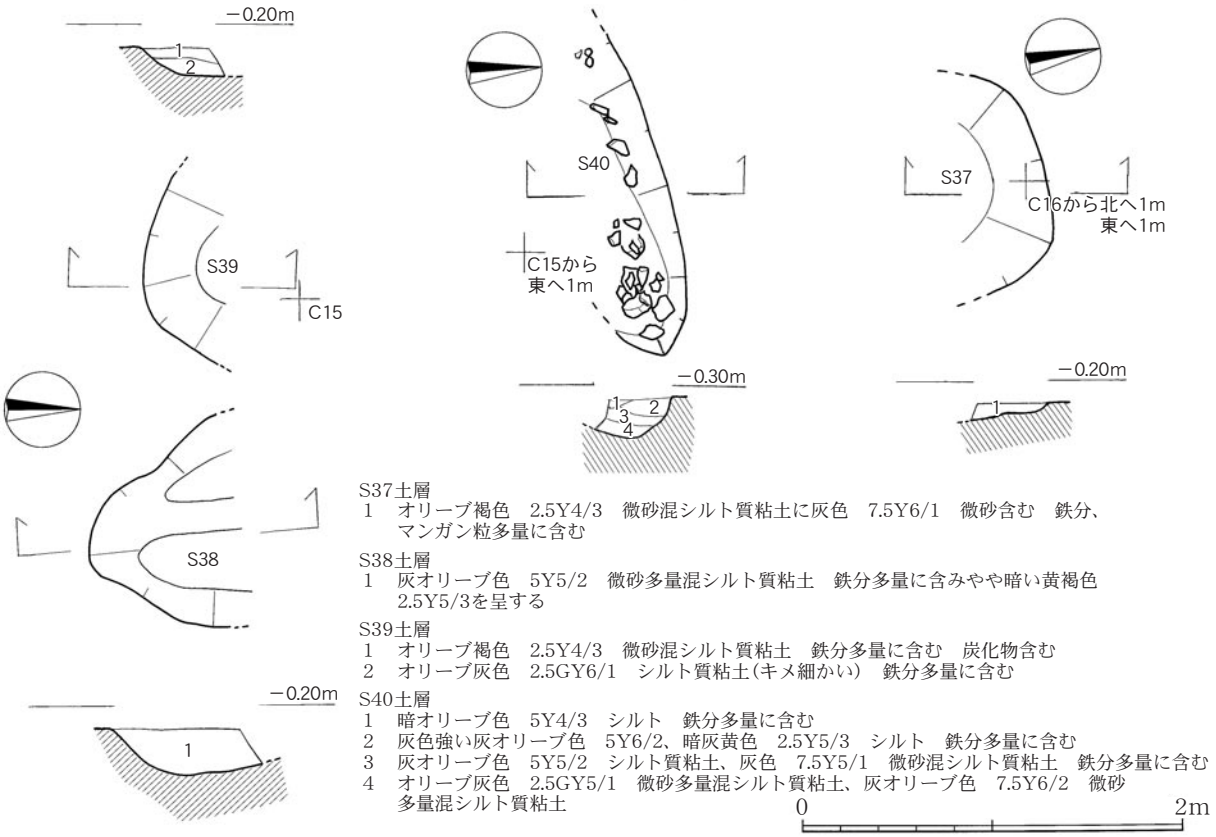
第１遺構面で検出された溝Ｓ 19によって、本遺構の北側部分が切られている。現状で東西1.1ｍほどである。底面に凹みが西側と東側の２ヵ所あり、ほぼ10㎝の段差がある。深いところで20㎝ほどである。遺物は出土していない。

４．土坑Ｓ 39（第24図、図版第７－６・７）

第１遺構面で検出された溝Ｓ 19によって、北側部分を切られている。深さは12㎝ほどである。遺物は出土していない。

５．土坑Ｓ 40（第24図、図版第７－８）

第１遺構面で検出された溝Ｓ 19によって、南側部分を大きく削られている土坑である。深さ20㎝前後である。



第24図　土坑Ｓ 37・Ｓ 38・Ｓ 39・Ｓ 40 実測図（縮尺：１／40）

第５節　江戸時代第１遺構面で検出された遺構と遺物

１．土坑Ｓ 16

１）**遺構**（第25図、図版第８～10）

この遺構の調査を始めたときは、人工掘削の大きな落ち込みないしは池ではないかと思われたが、石組み船入状遺構Ｓ 36 を確認した段階で、Ｓ 36 が廃絶埋没した後に、その窪みを廃棄坑として利用していたことが判明した。したがって、遺構の位置としてはＳ 36 の石組みの上およびＳ 36 の船入部とほぼ同じところということになる。

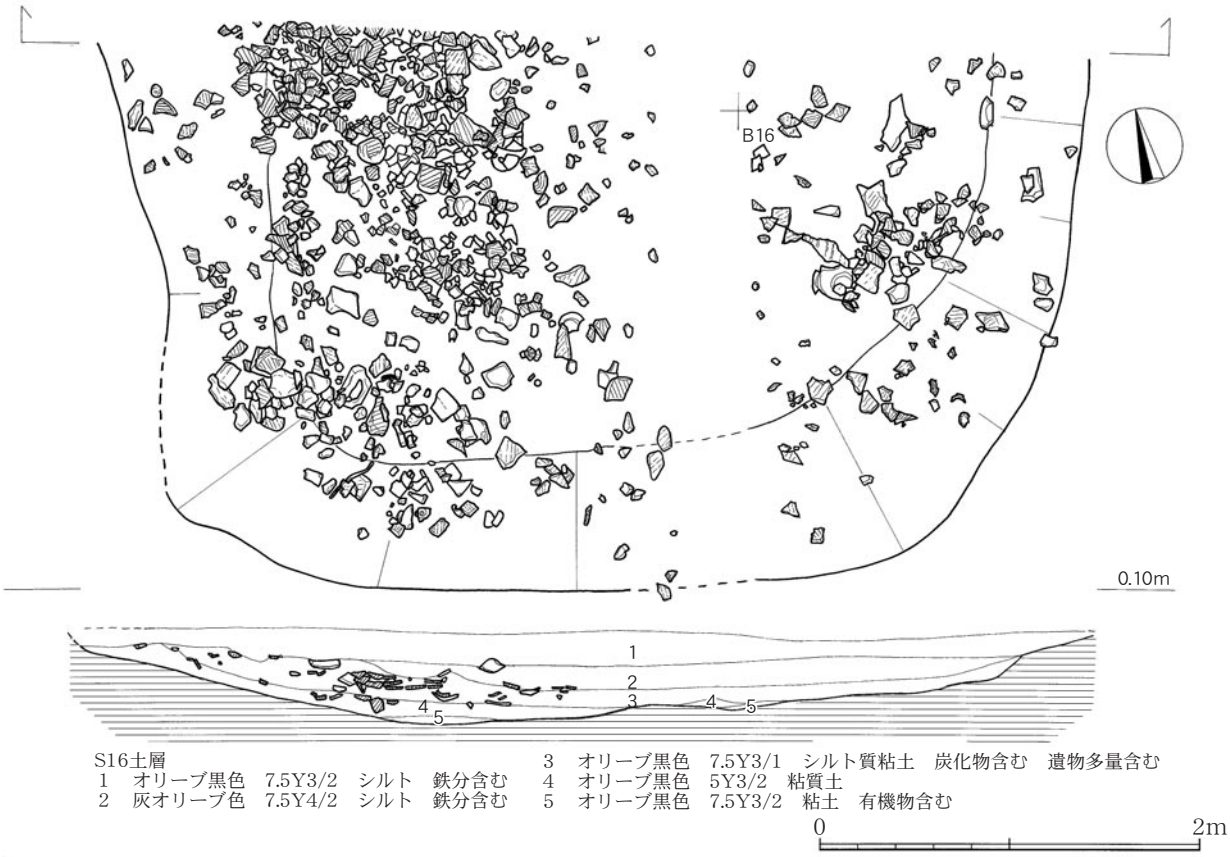
東西約 5.5 ｍの範囲に遺物がところどころに密集して存在していて、本発掘調査では遺物が最も多く出土した遺構である。

出土遺物の中には、瓦類・陶磁器類などの他に、土師質で「眉山下雲光」や「喜助」の刻印のある火鉢などの日常用品がいくつか見られ、出土品の多さとともに土師質日常用品の存在が注意される。

２）**出土遺物**（第 26 ～ 35 図、図版第 26 ～ 30）

〔土師器〕第 26 図 1 は、土師皿。底部は回転糸切り。口縁端部に煤が付着。18 世紀後半から 19 世紀。2 は、火消壺の蓋のつまみ。19 世紀。 3 は、焜炉の窓部分。外面はミガキで、稜は面取りされている。

第26図 4 は、外壁が立方体で、内部施設が環状となる焜炉。一辺21㎝の方形外壁の半分が残存し、かつ体部上方のみの残存である。内部施設最上部に角形の突起が２個確認されたが、３方向に付けられていたと復元できる。外壁外面はミガキが施される。外壁内面と内部施設外面は横方向のハケメ調整で、



第 25 図　土坑Ｓ 16 実測図（縮尺：１／40）

内部施設内面は未調整。外壁の角内面には粘土板を接合したときの縦方向のユビナデが認められる。外壁の上面と体部との境は面取りされる。内部施設外面には漆喰が薄く塗られている。外壁上面には煤が多く付着し、一部外壁体部の上方にも付着する。外壁上面には、摩滅して判読が難しいが、「喜助」と読める刻印がある（第27図１）。新蔵１丁目遺跡企業局総合管理センター地点では、「嘉助」の刻印のものが出土しているが、本例では七を三つ書いているので、喜と読まざるをえない。この「喜助」刻印は、徳島城下町遺跡では初めての出土例となる。

第26図５は、焜炉の底部で、日下分類のⅡＡ類に相当する。胎土は肌理の細かな精選されたもので、本遺跡出土の他の火鉢・焜炉類の胎土とは若干異なるという印象を受けた。底部の円盤は完全に残っている。底径16.5㎝で、底部から直立する体部は若干残るのみであるが、底部ぎりぎりの所に窓の下部がきている。窓外には窓にあわせて沈線が巡らされる。高台は２方向の切込みである。日下分類では、このⅡＡ類は３方向切込の高台とされているが、本品は２方向切込であるのが特徴である。外面には「眉山下雲光」の刻印があり（第27図２）、徳島城下町遺跡の発掘調査では初めての出土である。豊田進『阿波の陶磁』（雄山閣出版、1974年）には、眉山下雲光焼という簡略な記述があり、刻印の拓本が載せられている（第27図３）。本例の刻印はこれに非常に酷似するが、同一の印かどうかは判断できない。

第26図６は、焜炉。日下分類のⅡＣｂ類に入ると思われる。窓下端を含む一部の破片である。外面はミガキ、内面はナデである。窓下端と内面の一部に煤が付着している。７～９は、灰落しで、日下分類のオⅣＡ類である。**７**は、復元直径12.5㎝で、一面は灰白色に変色し所々剥離していて、胎土が赤変している。いっぽう、その裏面では変色は見られない。**８**は、復元直径12㎝で、７と同様な状況が見られる。**９**は、完形に復元できたもので、直径12㎝。両面とも淡灰白色に変色し、表面が一部剥離している。両面とも使用されていたものである。

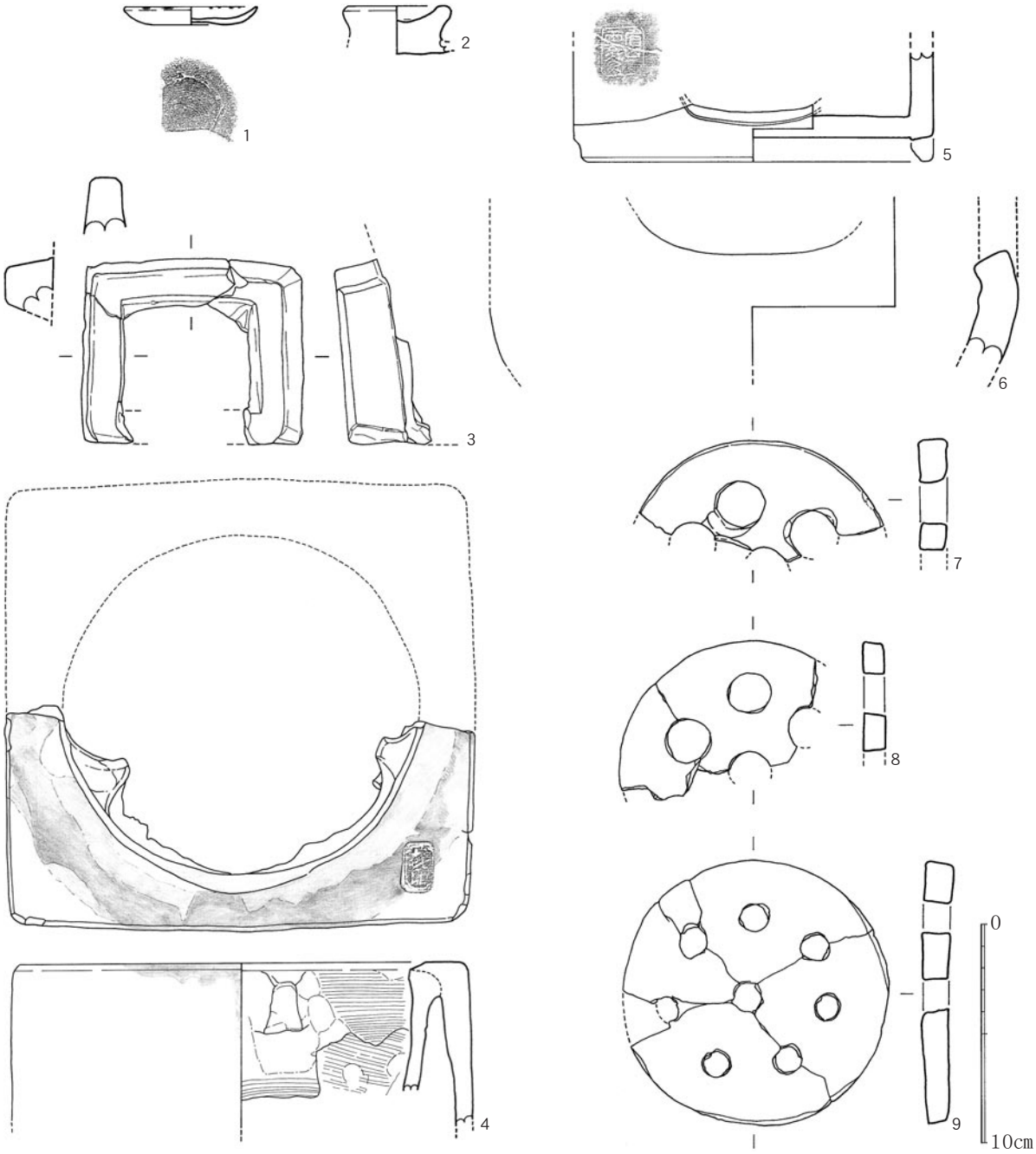
第28図１は、復元口径21㎝の焜炉の口縁部片。日下分類のⅡＣ類に入ると思われる。内面に突起があり、半円形になると思われる切込の窓部分が一部残存する。外面・口縁端面・窓部はミガキ。窓部の角は丁寧な面取りが行われる。内面の突起部上から口縁端面、窓部に煤が付着する。内面の突起より下および外面には煤は見られない。**２**は、火鉢。日下分類のＩＢ類に相当すると思われる。下部で器壁がかなり厚くなっているので、輪高台に続くものと思われる。頸部に鋭い沈線が巡る。外面から口縁部内面にかけて、非常に丁寧なミガキが施される。内面体部はこれも丁寧なヨコナデが施される。内外面の一部に煤が見られる。**３**は、火消壺。日下分類のⅣＢ類に相当する。内外面ともに剥離が甚だしい。

第29図１は、火入か香炉の蓋。煉り込みの胎土。19世紀のもの。

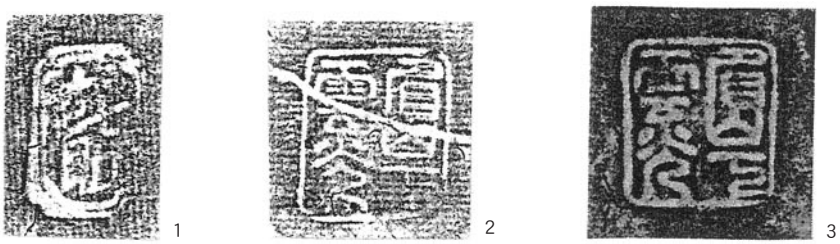
〔陶器〕第29図２は、備前の灯明皿。内面に塗土を施す。18世紀末から19世紀にかけてのもの。**３**は、京・信楽系の灯明皿。内面に菊花貼付文がある。口縁部外面に煤が付着。底部には、図示していないが、墨書の痕跡が見られる。19世紀代のものである。**４**は、大谷焼の土瓶の蓋。19世紀中葉以降のものである。**５**は、大谷焼の鍋。内面全面に釉がかかる。底部近くには小粘土塊を貼り付けていて、三足と思われる。底部に墨書の一部があり、「□(和？）の〔……〕」か。19世紀中葉以降のものである。

第29図６は、産地不明のミニチュア玩具の鍋。鉄釉がかけられ、把手が付く。**７**も、産地不明のミニチュア玩具の鍋。鉄釉がかけられる。**８**は、大谷焼の土瓶の下半部。底部に墨書の一部が鮮明に残るが、解読不能である。**９**は、京・信楽系のしめなわ文茶碗。海老は赤、目は緑の上絵付けである。**10**は、京・信楽系の碗。19世紀代のものである。

第29図11は、京・信楽系の土瓶底部。本破片の外面は無釉で、内面には灰釉が全面にかけられてい

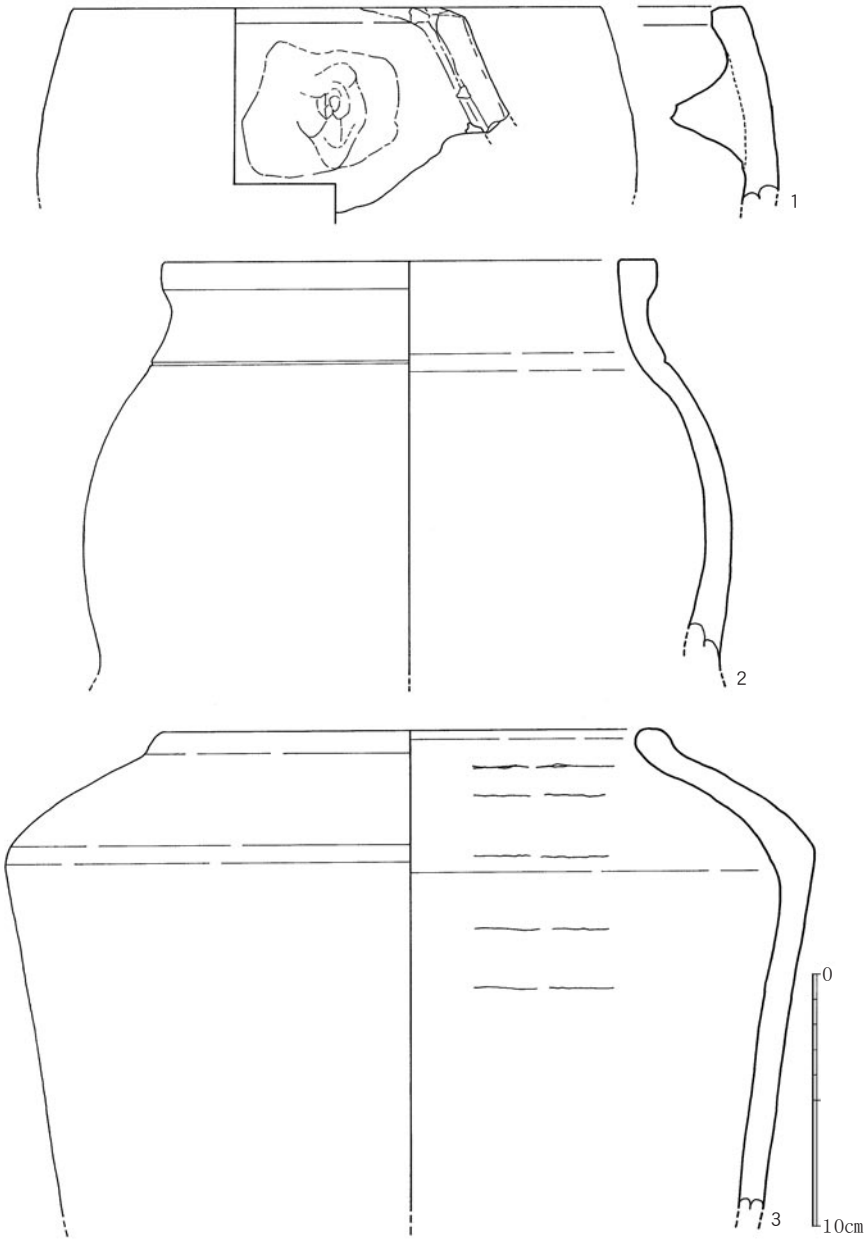


第 26 図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(1)（縮尺：１／３）



第 27 図　土坑Ｓ 16 出土火鉢・焜炉類拓本（実大）

１．土坑Ｓ 16 出土「喜助」刻印　２．同「眉山下雲光」刻印　３．豊田進『阿波の陶磁』掲載「眉山下雲光」刻印

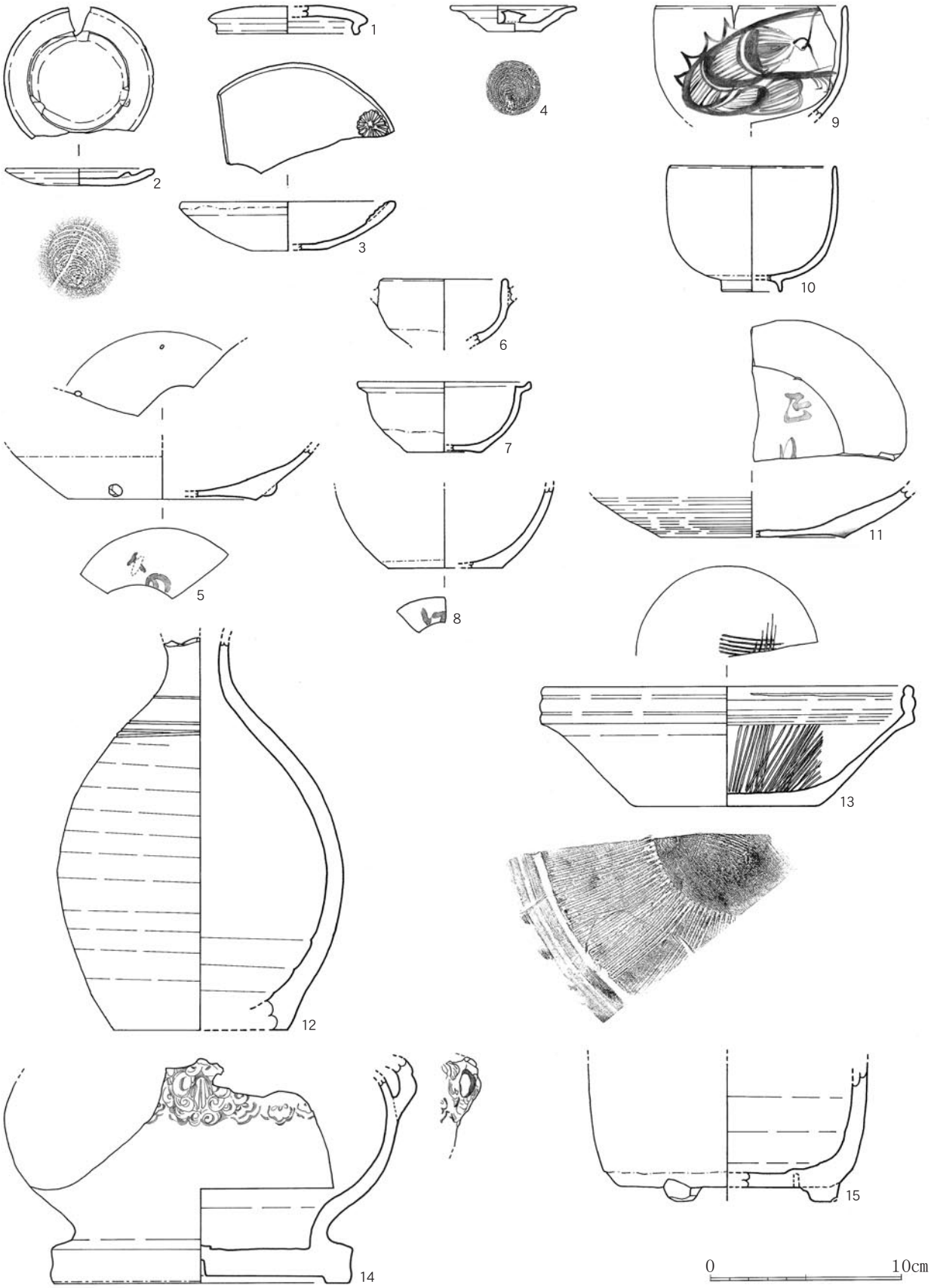


第 28 図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(2)（縮尺：１／３）

る。底部には「正月」の墨書が見られる。19 世紀。**12** は、備前の徳利。頸肩部の境に沈線を１条巡らし、その下に螺旋沈線を巡らす。17 世紀後半以降のもの。**13** は、堺・明石系の擂鉢。幕末ころのもの。**14** は、瀬戸・美濃系の火鉢。底部を除いた外面には緑釉を施し、内面全面には淡い緑色の発色の灰釉が塗られている。体部上半には把手が付けられている。底部中央に小さな穿孔がなされる。19 世紀中頃のもの。**15** は、瀬戸・美濃系の火鉢。外面には緑釉が施され、その下部は厚く釉溜りとなっている。底部には、低い三足が付けられ、その各足の内側寄りに小さな穿孔がなされている。19 世紀代のもの。

第 30 図は、瀬戸の水甕。口径 38.6 ㎝、器高 27.5 ㎝で、器体上下に雷文を押捺して巡らす。体部には陽刻の雲龍文を配する。外面は緑釉、内面は灰釉で上半部には緑釉を掛け流している。底部外面は無釉。内面底部には大きな胎土目跡が８か所に残っている。18 世紀末から 19 世紀にかけてのものである。

第 31 図 1 は、丹波の甕。復元口径 48 ㎝。外面に鉄釉を施し、内面にも鉄釉がかかる。

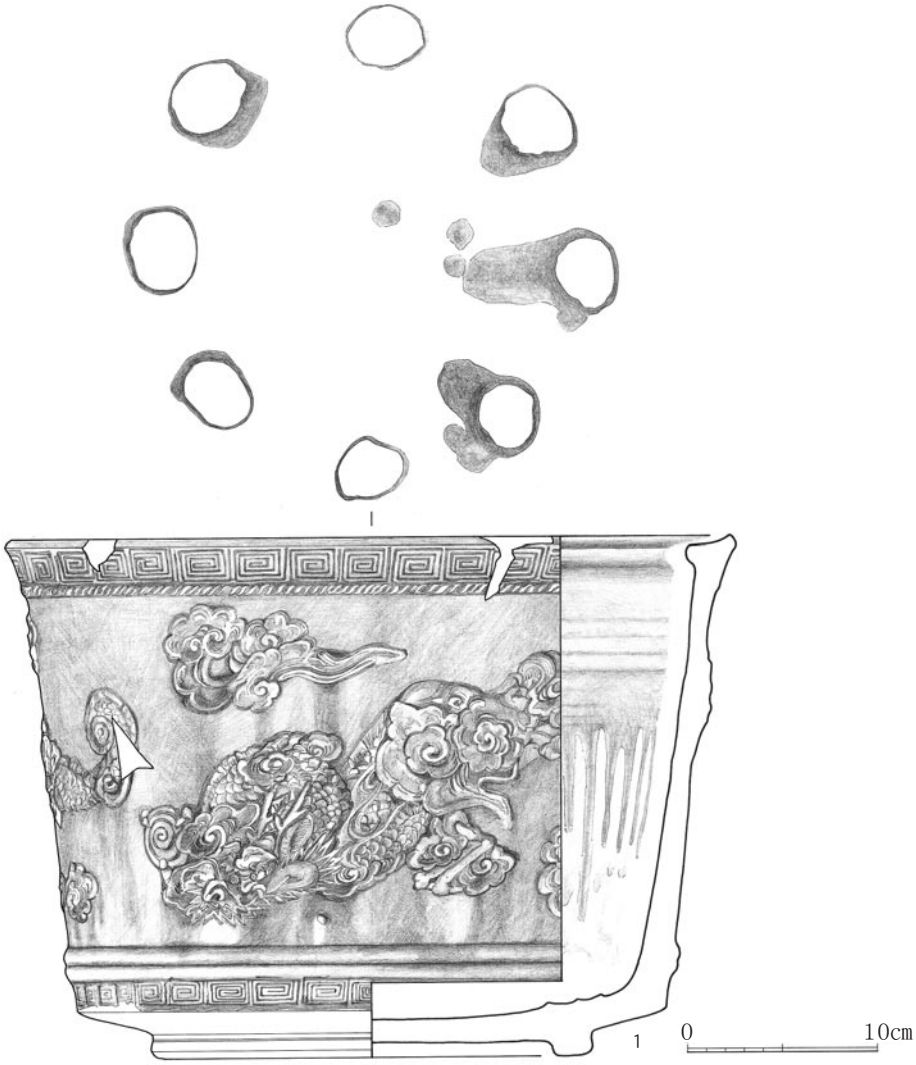


第29図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(3)（縮尺：１／３）

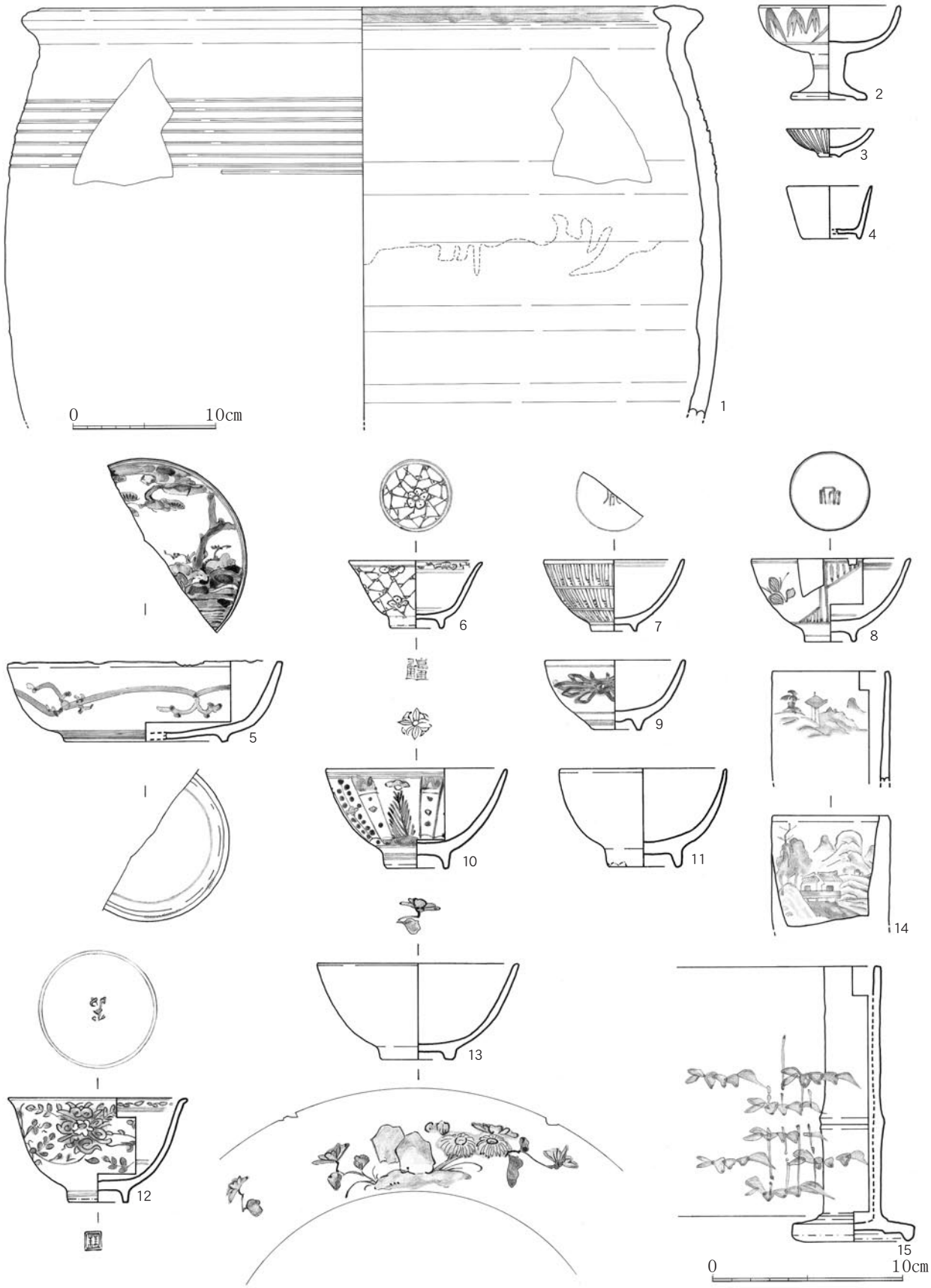
〔磁器〕第31図2は、肥前系の仏飯器。体部に笹文をあしらう。釉は脚部の上半部までしか施されていない。18世紀後半から19世紀のもの。**3**は、肥前系の紅皿。白磁で、外面底部付近は無釉である。18世紀から19世紀にかけてのものである。**4**は、肥前系の白磁の小杯。18世紀末から19世紀のもの。**5**は、肥前系の青磁染付皿。口縁端部は輪花になる。青磁釉は内面の体部にのみ施される。見込みには、松竹梅文が描かれる。外面には唐草文が濃のみで描かれる。ガラス焼継を行っている。18世紀後半のものであるが、ガラス焼継が普及するのは19世紀以降なので、廃棄時期はさらに新しくなると思われる。

第31図6は、関西系の小杯。外面全面、内面口縁部と見込みに氷裂文に梅花を配した文様を施す。19世紀中葉以降のもの。**7**は、肥前系の小杯。外面に暦文を施し、見込みには「壽」のくずし字がある。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**8**は、肥前系の小杯。外面に草文、見込みに源氏香文を描く。これも18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**9**は、肥前系の小杯。外面に結びのし文をコンニャク印判で施す。内面は無文。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**10**は、肥前系の小広東碗。外面は区画された瓔珞文が描かれる。見込みには十字花文が描かれる。18世紀後半のものである。

第31図11は、肥前系の白磁碗。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**12**は、瀬戸・美濃系か関西系の端反り碗。内面口縁部に花唐草文、見込みにも花唐草文を配する。外面には、牡丹唐草文を描く。



第30図　土坑Ｓ16出土遺物実測図(4)（縮尺：１／４）



第31図　土坑Ｓ 16出土遺物実測図(5)（縮尺：１／３）　１は縮尺：１／４

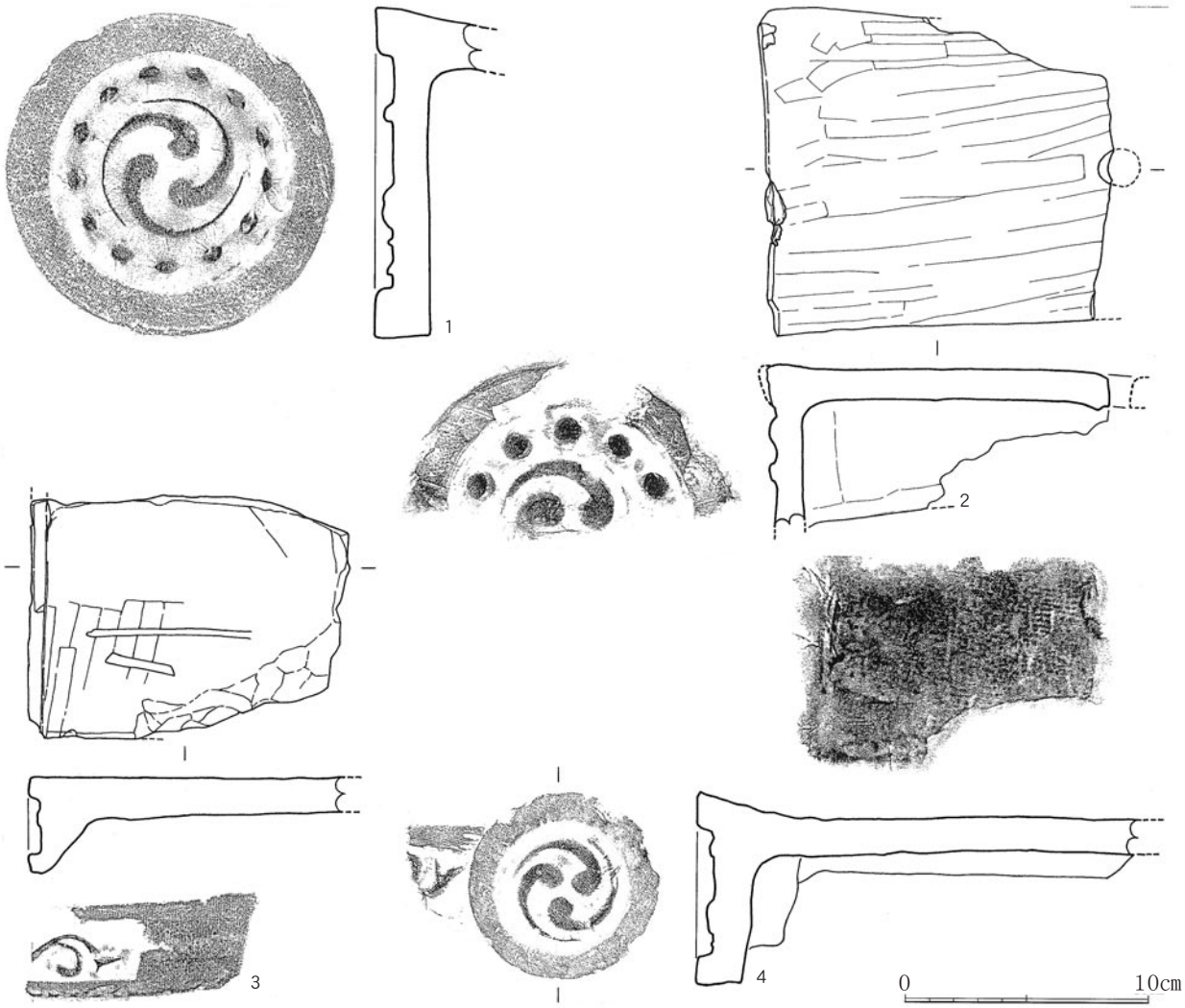
高台内には、二重方形枠内に変形字銘がある。13は、肥前系の碗。外面と見込みに菊花文を描く。高台は、幅広のものである。18世紀後半のもの。14は、関西系の筒碗であろうか。口縁端部と口縁部内面が無釉なので、蓋を伴うものと見られる。外面に山水文を描く。19世紀のもの。15は、肥前系の筆立あるいは花立。体部は竹の節部を模り、外面に竹文を配する。高台は蛇の目凹形である。19世紀のものである。

〔瓦〕第32図１は、巴文軒丸瓦。２は、巴文軒丸瓦で、丸瓦部に穿孔がある。３は、唐草文軒平瓦。４は、軒桟瓦。

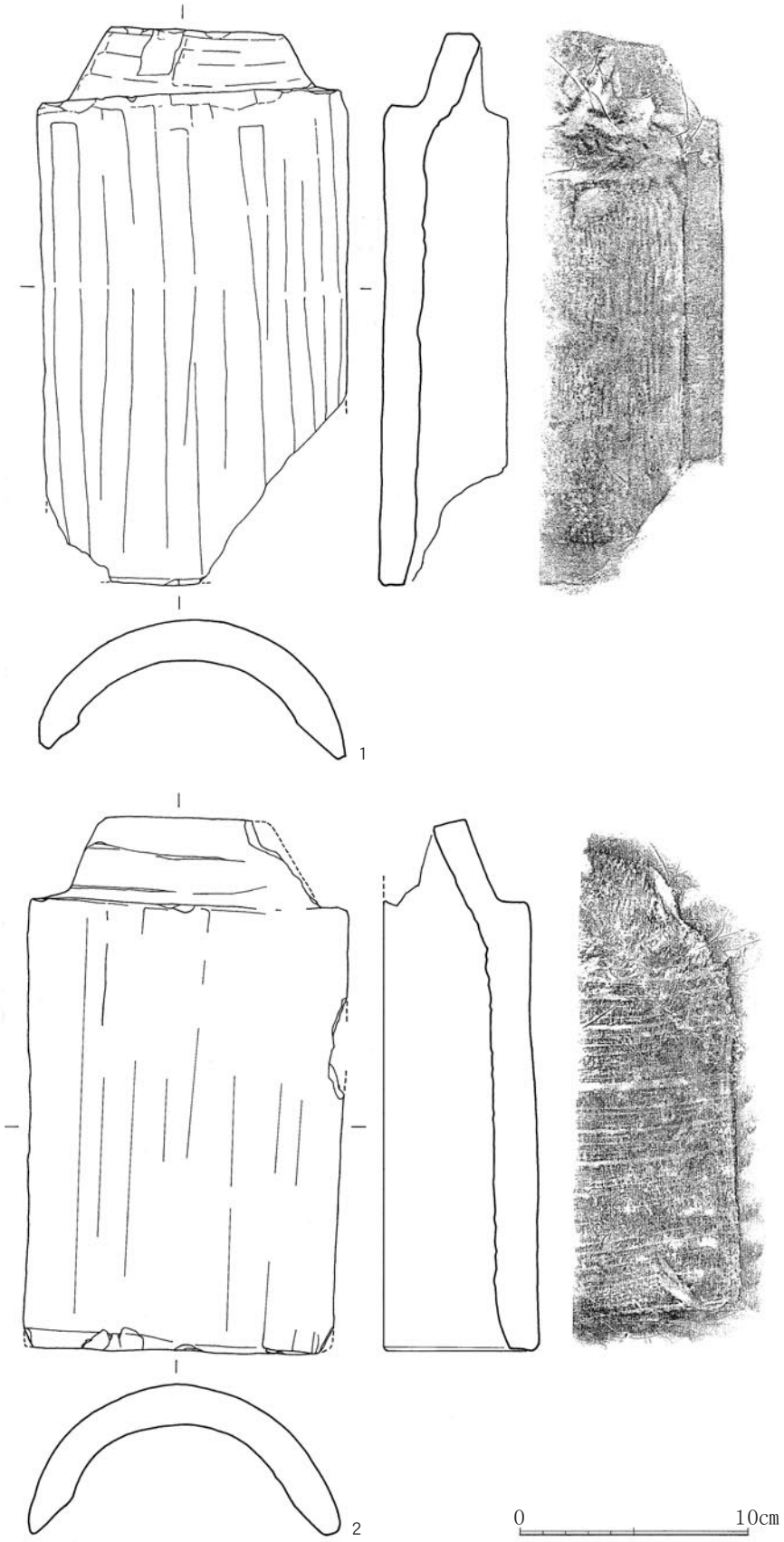
第33図１・２は、丸瓦。**第34図**１は、丸瓦で、穿孔の見られるもの。

〔特殊品〕第34図２は、縄状突帯を有する肥前系の陶器大甕の破片を再利用して、加工円盤にする途中のもの。一部の縄状突帯は剥ぎ取られている。３～８は、瓦を再利用した加工円盤。このうち、３・５・６は、完成品である。きれいな円形で、側面が磨かれている。７は、側面が磨かれ、完成品と考えられるが、いびつな円形である。４と８は、打ち欠きは最終に近いが、側面は磨かれていない未成品である。

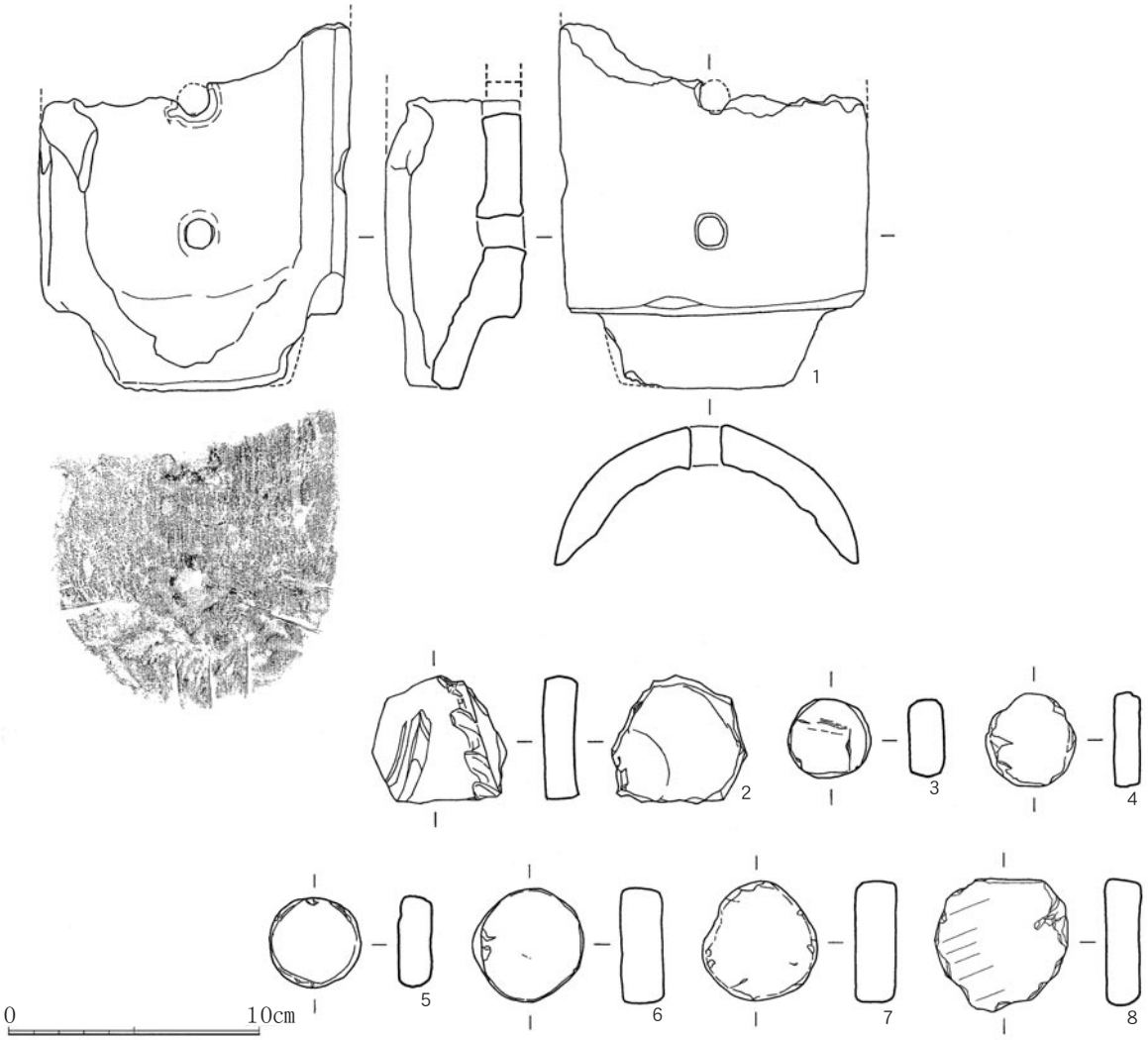
第35図１は、土製ミニチュアで、紅皿写しと思われる。２は、土製秉燭。無釉で、突起は上からの方形の切込を有す。突起の上面には煤が付着する。３は、土製鳩笛。上面に透明釉をかけ、さらに頭上



第32図　土坑Ｓ 16出土遺物実測図(6)（縮尺：１／３）



第33図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(7)（縮尺：１／３）



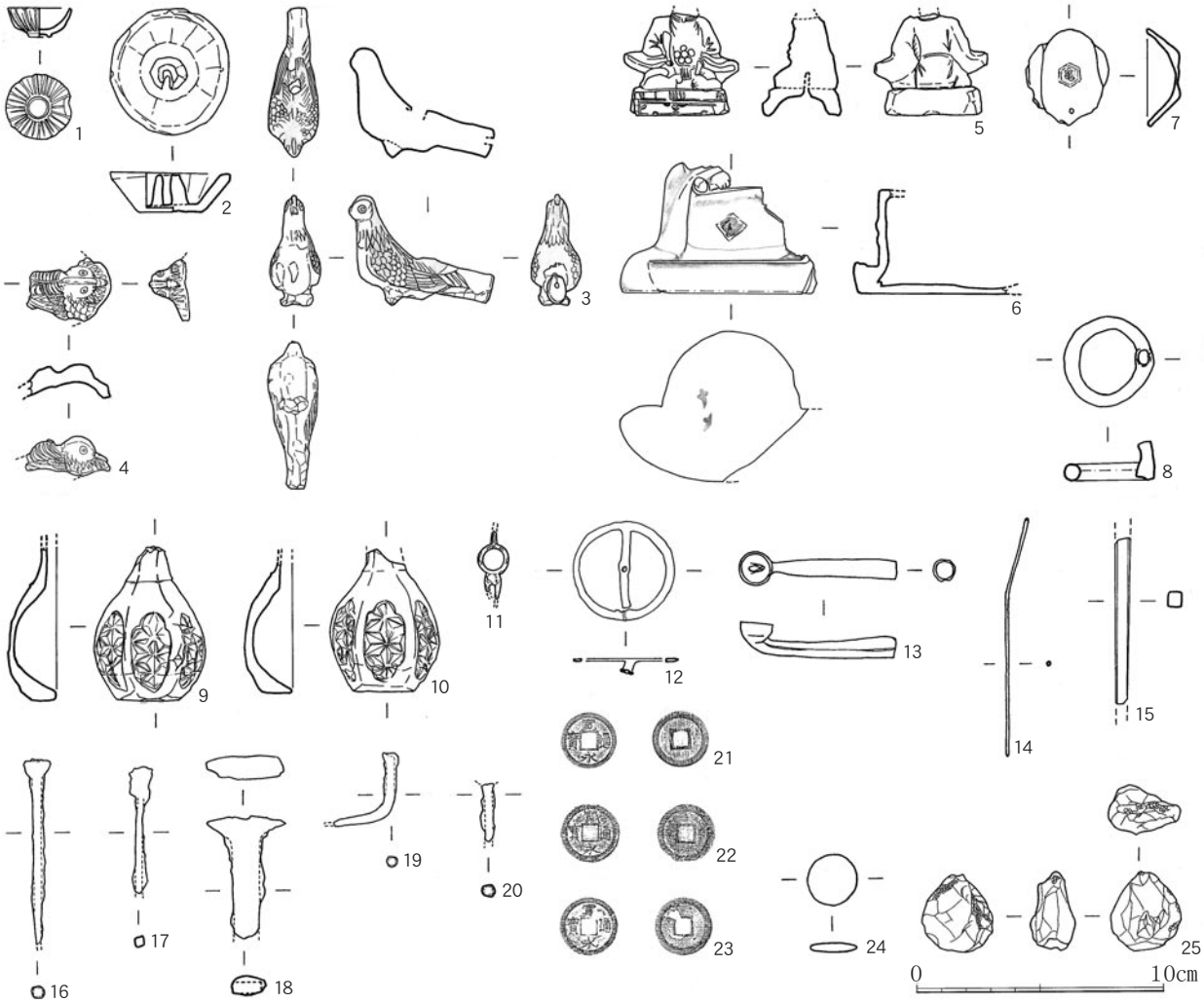
第 34 図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(8)（縮尺：１／３）

部から羽にかけて緑釉を施す。４は、土製オシドリ。頸部上面に、製作時に穿孔された１㎜弱の非常に小さな穴がある。５は、土製人形の天神。天神様の体のみに鉄釉がかかる。底には窪みが作られ、中心に円形の穿孔がある。

第 35 図 6 は、京・信楽系陶器の水滴。胎土は白色の非常に精選されたもので、内面には布目痕が見られる。注口部は手の右側に設置されるが、欠損している。前面の下部は浅い溝状に作られる。底部に墨書があり、カタカナの「ナソ」と読め、記号か。７は、４の土製オシドリの下半部で、底部に二重六角枠内に「亀」の押印がある。このことは製図・レイアウト後に判明したため、別個に掲載しているが、本来は４と７とは接合する。８は、灯心押さえ。産地不明の陶器である。一本の粘土紐から成形されているが、欠損のため、長さ不明。上半部には鉄釉をかける。底部は無釉。９・10 は、土製ミニチュアの六角面取り徳利。２点は同一個体ではないが、作りと押印は全く一緒である。底部を除いて、緑釉を施す。

〔金属製品〕第 35 図 11 は、銀製簪。頭部には耳掻きが付いていたと思われる。陰刻の文様がかすかに見られる。12 は、鉄製で、飾り金具と思われる。中心部に小さな鋲の痕跡が残っている。13 は、真鍮製の煙管雁首部。19 世紀代の形態である。14 は、真鍮製の簪の髪にさす部分の破片。

第 35 図 16 ～ 20 は、鉄製釘。このうち、16 は頭巻釘。



第 35 図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(9)（縮尺：１／３）

〔銭貨〕第 35 図 21 ～ 23 は、寛永通宝。

〔ガラス製品〕第 35 図 15 は、笄と思われる。外面はスリガラス状となっている。

〔石製品〕第 35 図 24 は、黒色の碁石。**25** は、火打石。淡い青色のチャートである。

２．溝Ｓ 19

１）**遺構**（第 36 図、図版第 11）

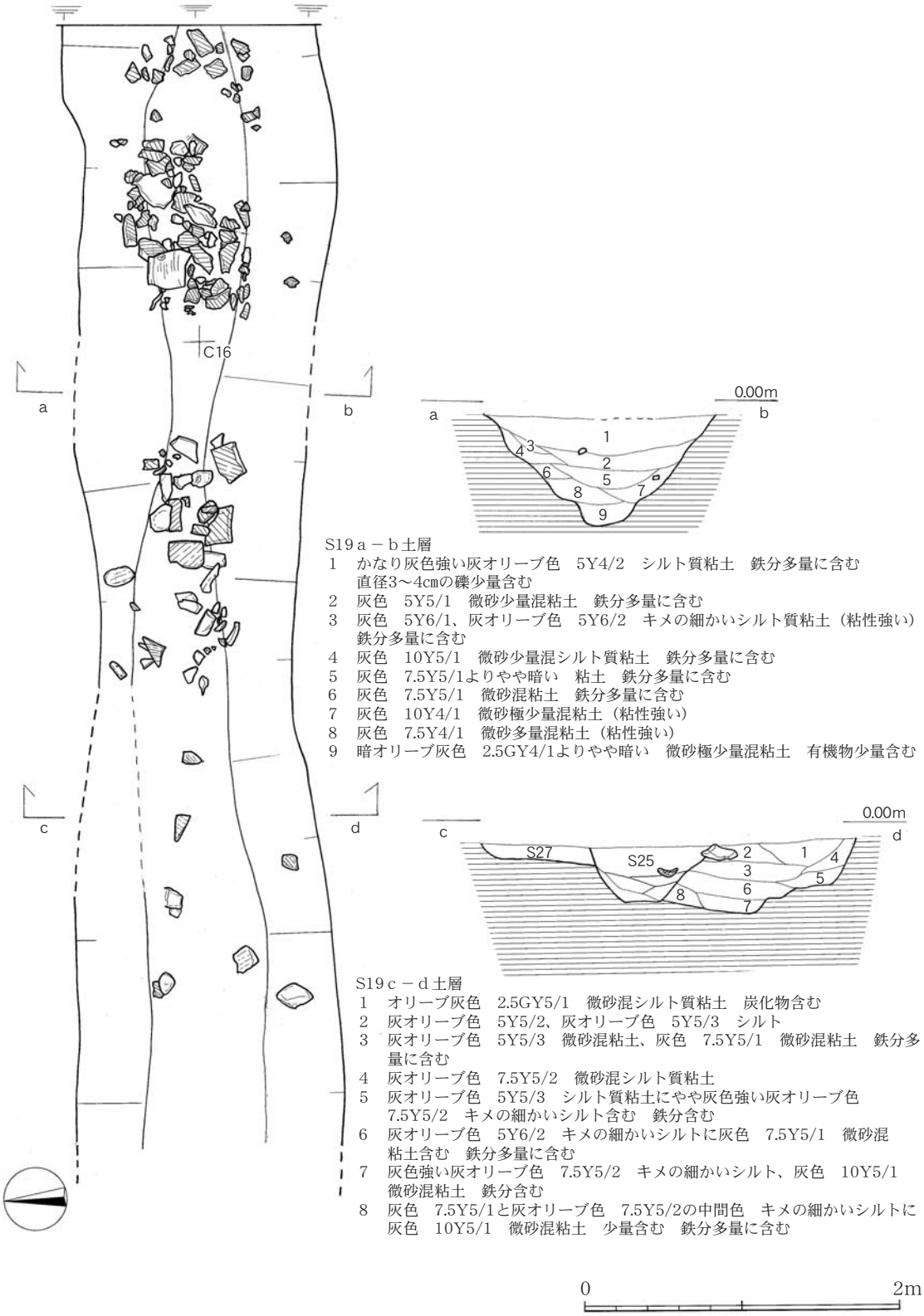
当初は調査区東壁にかかる大きな土坑として調査を行っていたが、調査が進むにつれて西側にのびていく溝であることを確認した。幅 1.5 ～ 1.7 m、深さ 70 ㎝弱である。

この溝より南側には各遺構面とも遺構が少なく、屋敷地の中でもこの溝以南は畑などに使用されていた可能性がある。

２）**出土遺物**（第 37・38 図、図版第 30）

〔土師器〕第 37 図 1 は、関西系の焙烙。内面底部には煤が付着し、黒色に変色している。19 世紀代のもの。

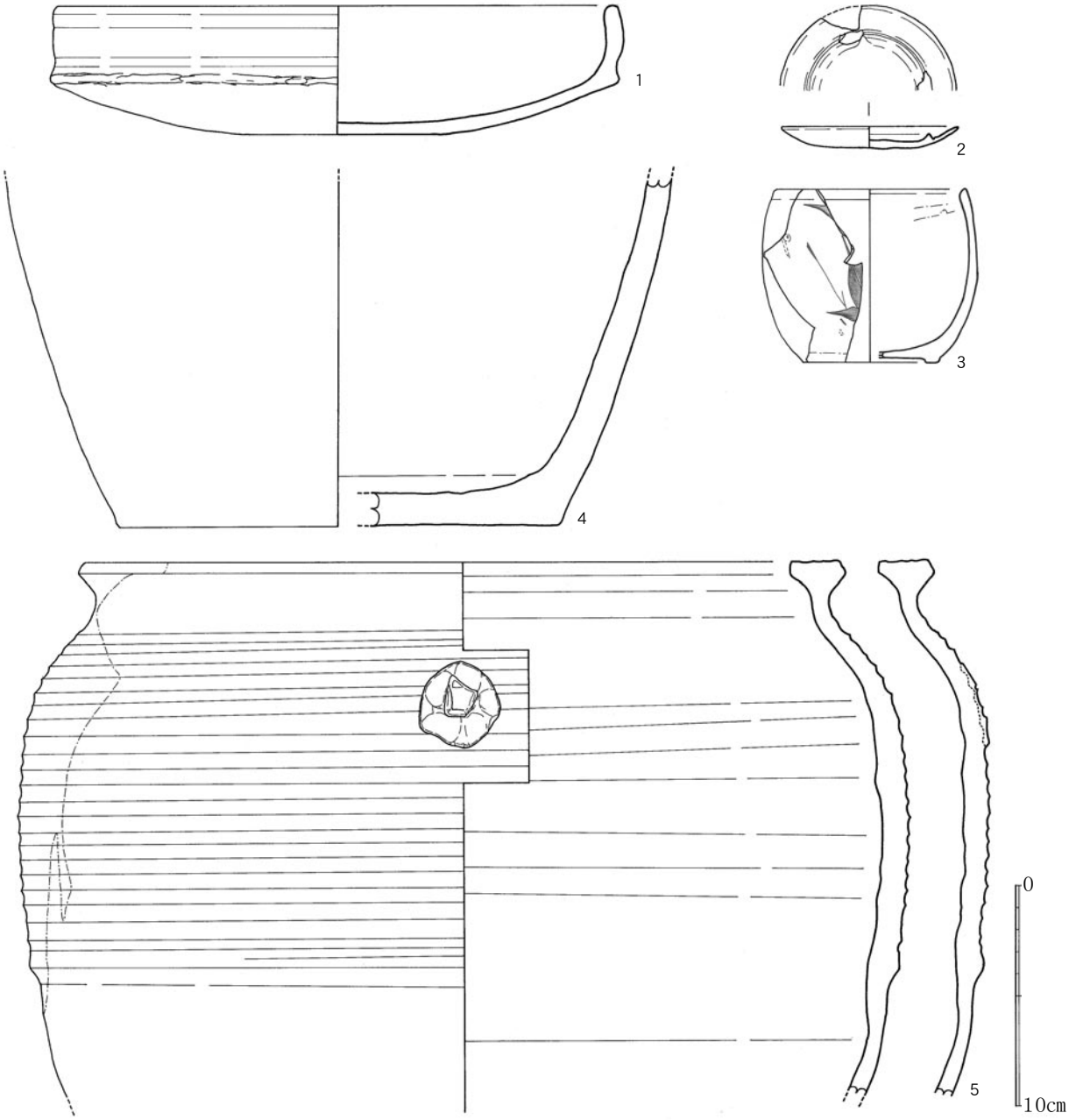
〔陶器〕第 37 図 2 は、備前の灯明皿。内外面に塗土をしていて、こげ茶色を呈する。19 世紀代。 **3** は、京・信楽系の香炉ないしは火入。外面から口縁部内面にかけて白化粧をし、その後施釉している。文様



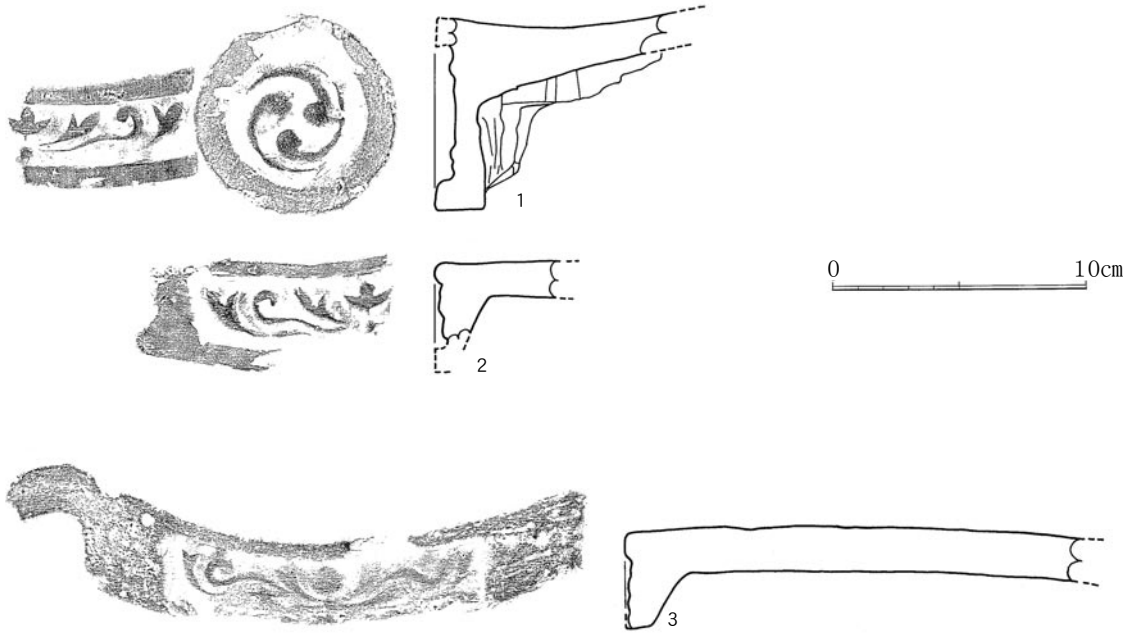
第36図　溝Ｓ 19実測図（縮尺：１／40）

は、鉄絵と色絵の草花文。体部に縦方向に窪んだ部分が一部見られるので、ロクロ成型の後に型打ちを行っている。18 世紀末から 19 世紀にかけてのもの。 **4** は、備前の甕底部。内面に火襷が見られる。 **5** は、丹波の甕。付遊環を肩部に付ける。18 世紀後半から 19 世紀初頭のものである。

〔瓦〕第 38 図 1 は、巴文と唐草文の軒桟瓦。 2 は、唐草文の軒平瓦。 3 は、唐草文の平瓦。



第 37 図　溝Ｓ 19 出土遺物実測図(1)（縮尺：１／３）



第 38 図　溝Ｓ 19 出土遺物実測図(2)（縮尺：１／３）

３．土坑Ｓ 18

１）**遺構**（第 39 図、図版第 12 － １）

溝Ｓ 19 の北側で検出した土坑である。その西側は土層観察用のアゼ中に入っていて、未調査である。南北の長さ 1.05 m、深さ 30 ㎝弱の土坑である。

２）**出土遺物**（第 41 図）

〔陶器〕第 41 図 1 は、京・信楽系の色絵碗と思われる。高台内に円刻と墨書がある。墨書は、図面の右側にカタカナの「カ」、左側にやや薄く「エ」と書かれている。

４．土坑Ｓ 21（第 39 図、図版第 12 － ２・３）

土坑Ｓ 22 とともに、調査区の南半部で検出された遺構である。径 20 ～ 25 ㎝、深さ 12 ㎝のほぼ円形の小さな土坑である。

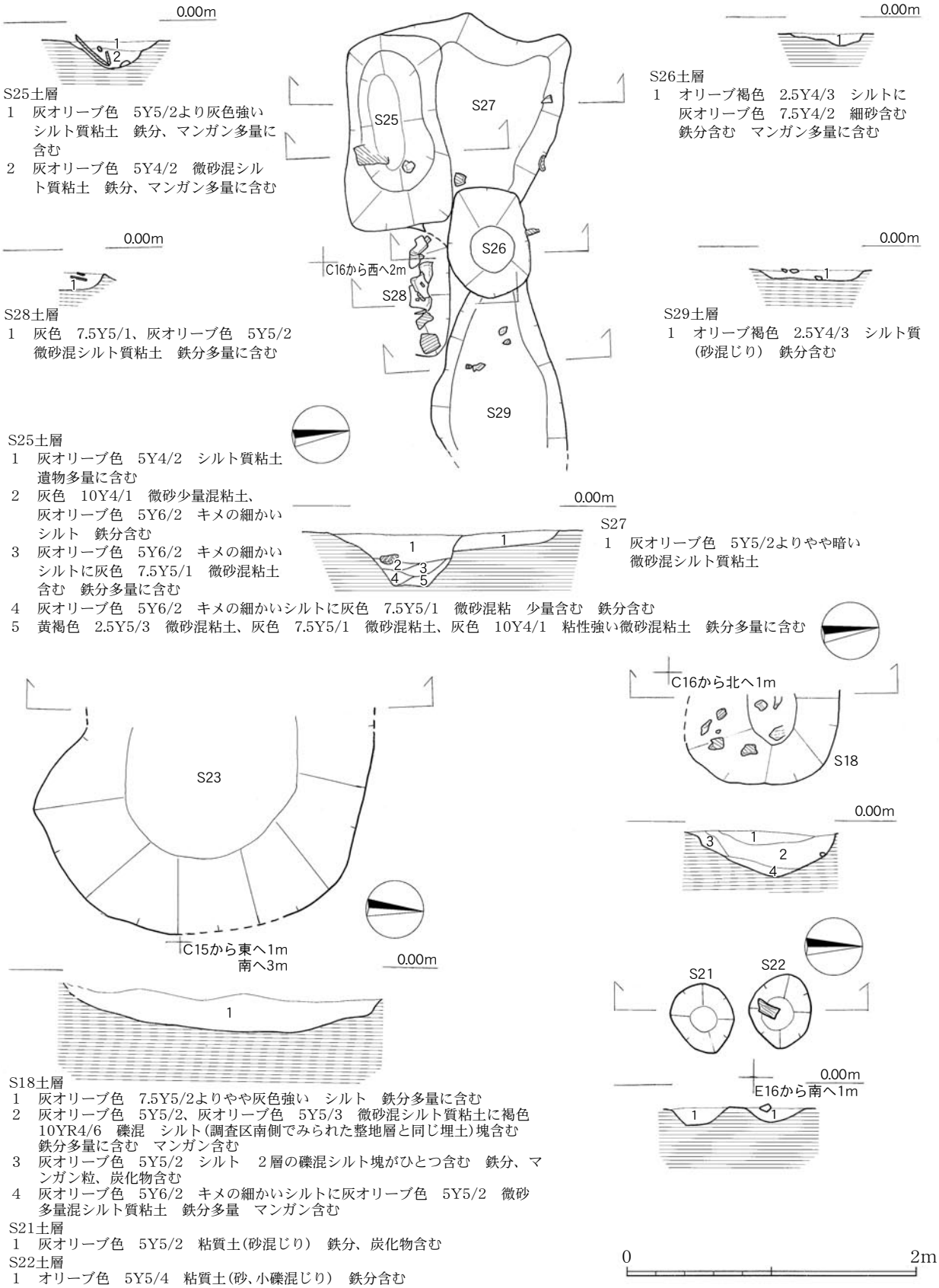
５．土坑Ｓ 22（第 39 図、図版第 12 － ２・３）

土坑Ｓ 21 のすぐ北側に位置する。径 20 ～ 25 ㎝、深さ 10 ㎝のほぼ円形の小さな土坑である。規模は土坑Ｓ 21 と同じで、遺構の性格も同じと思われる。

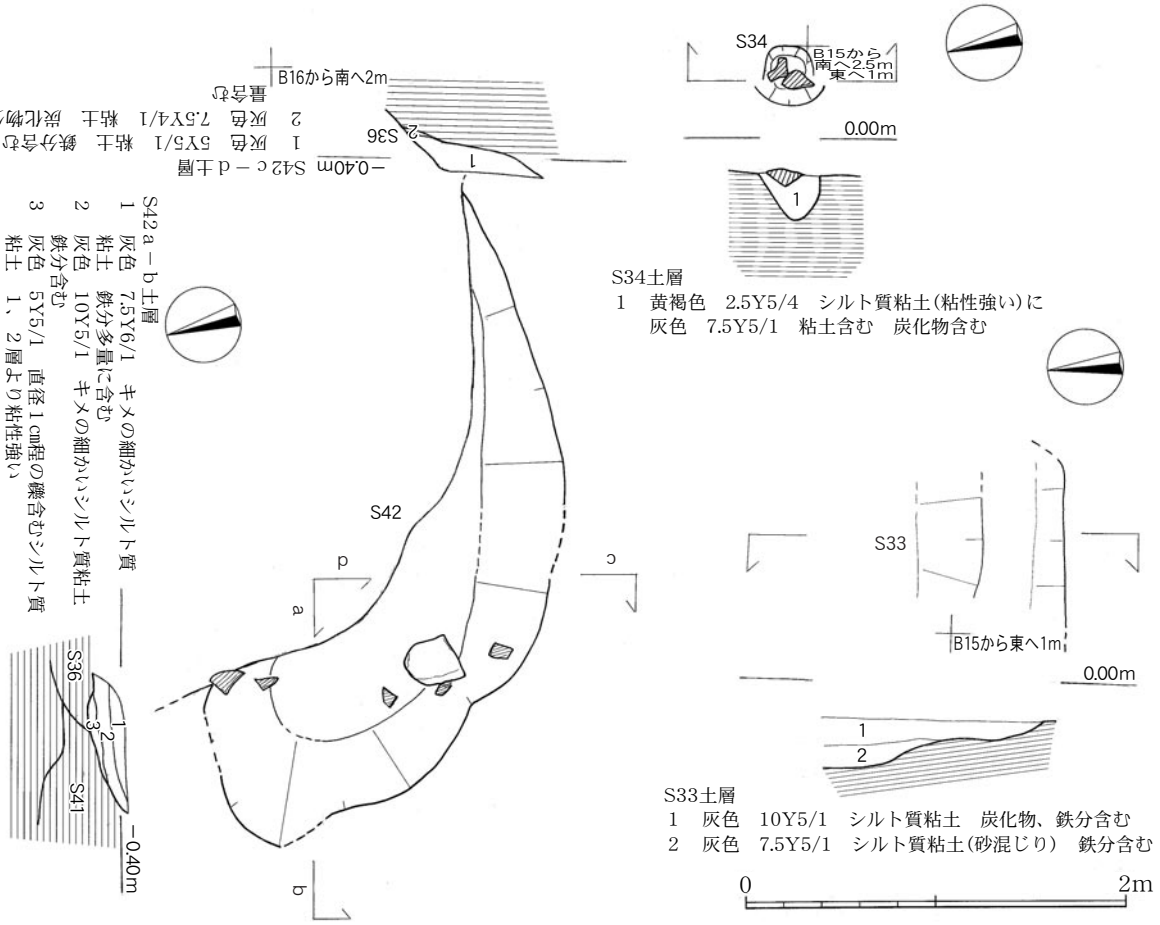
６．土坑Ｓ 23（第 39 図、図版第 12 － ４・５）

この遺構の西側部は調査区外にのびている。調査可能であった部分の南北の長さは約 2.3 m、深さは約 30 ㎝である。この遺構の南側の一部は、土坑Ｓ 20 によって切られている。

埋土は褐色で、それは調査区南側で検出した整地層と同じ土質であった。また、この土坑底部で南北に走る噴砂痕のようなものを確認したが、明確に噴砂と確定はできなかった。



第39図　土坑Ｓ18・Ｓ21・Ｓ22・Ｓ23・Ｓ25・Ｓ26・Ｓ27・Ｓ28・Ｓ29実測図（縮尺：１／40）



第40図　土坑Ｓ33・Ｓ34・Ｓ42実測図（縮尺：１／40）

７．土坑Ｓ25（第39図、図版第12－６）

南側で溝Ｓ19を切り、北側で土坑Ｓ27を切っている。長軸1.35ｍ、短軸75㎝ほどの隅丸長方形を呈する土坑である。深さは約35㎝である。

８．土坑Ｓ26（第39図、図版第12－７・８）

長軸75㎝、短軸55㎝の楕円形に近い形態の土坑である。深さ10㎝弱である。土坑Ｓ27と土坑Ｓ29を切っている。

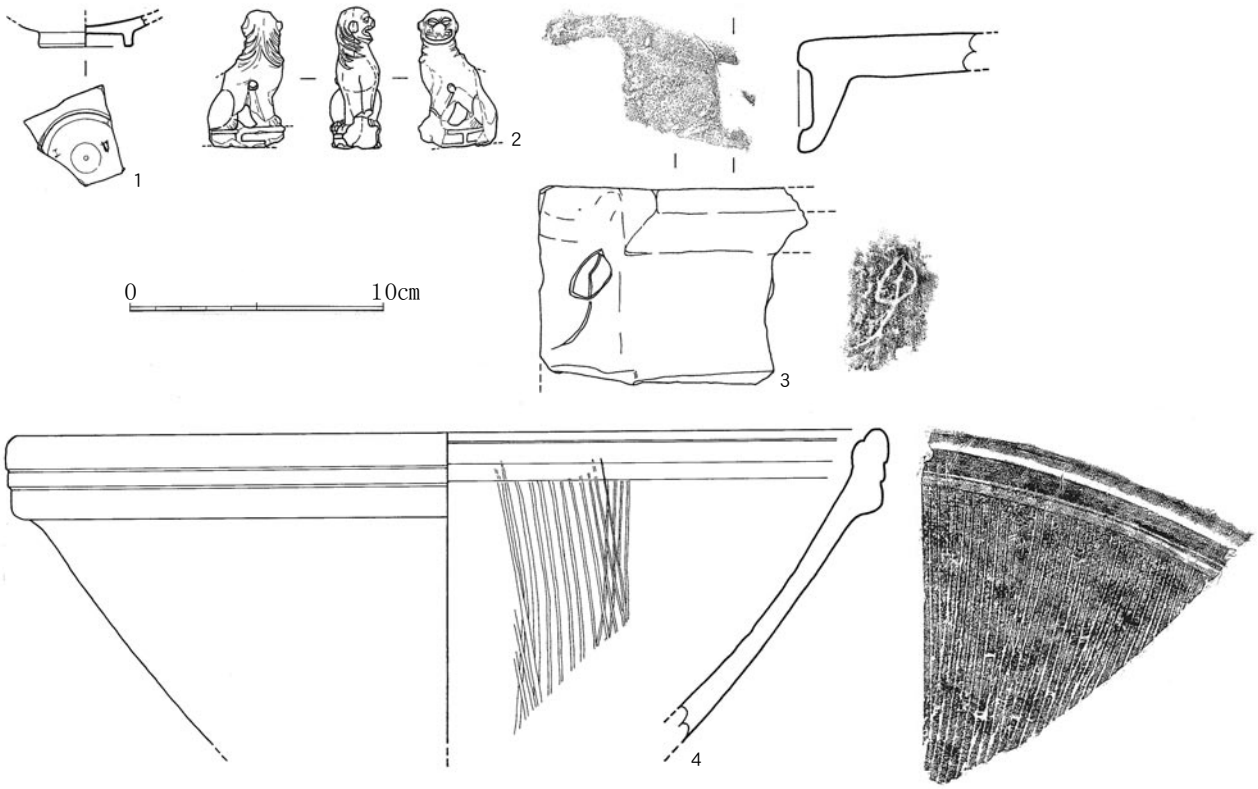
９．土坑Ｓ27

１）遺構（第39図）

南側を土坑Ｓ25によって切られ、東側を土坑Ｓ26によって切られている。したがって、正確な大きさや形状を確定することはできないが、推定で東西1.8ｍ、南北1.4ｍほどの東側にむかってやや狭くなる土坑であろう。深さ10㎝前後である。

２）出土遺物（第41図、図版第30）

〔特殊品〕第41図２は、土製の狛犬。



第41図　土坑Ｓ 18・Ｓ 27・Ｓ 28・Ｓ 42 出土遺物実測図（縮尺：１／３）

10.　土坑Ｓ 28

１）**遺構**（第39図、図版第13－１・２）

本遺構の南側部分は、溝Ｓ 19によって切られている。東西の長さが90㎝ほどであり、深さは15㎝前後である。

２）**出土遺物**（第41図）

〔瓦〕第41図３は、唐草文の軒平瓦。淡灰褐色のややあまい焼きで、裏面に陰刻がある。窯印であろうか。

11.　土坑Ｓ 29（第39図、図版第13－３・４）

西側を土坑Ｓ 26によって切られ、東側端は土層観察用のトレンチとアゼで確認することができなかった。南北の最大幅が95㎝ほど、深さが８㎝ほどである。

12.　土坑Ｓ 33（第40図、図版第13－５・６）

西側部分が井戸Ｓ 08によって切られ、東側部分が土坑Ｓ 16によって切られているため、全体を復元することができない。溝などの可能性は低く、おそらく土坑になるものと思われる。北側に向かって現状では２段になって落ちていく状況が認められる。現状の最大の深さは30㎝ほどである。

13.　土坑Ｓ 34（第40図、図版第13－７・８）

作業進行上、東側を10㎝ほど下げてしまったために、全体の形状は不明であるが、直径40㎝ほどの円形の土坑であったと思われる。深さは25㎝ほどである。

14. 土坑Ｓ 42

１）**遺構**（第40図）

遺構番号は新しいが、石組み船入状遺構Ｓ 36を精査中に検出した江戸時代第１遺構面に相当する遺構である。第３遺構面検出の素掘り船入状遺構Ｓ 41を西壁断ち割りによってこの遺構より先に検出したため、番号がＳ 41の次になってしまった。土坑Ｓ 16によって北側部分が切られているため、全体の形状は不明である。深さ20㎝ほどである。

２）**出土遺物**（第41図）

〔陶器〕第41図４は、堺・明石系の擂鉢。18世紀中葉のものである。

第６節　江戸時代第１遺構面上半で検出された遺構と遺物

１．井戸Ｓ 08

１）**遺構**（第42図、図版第14・15上・16－１）

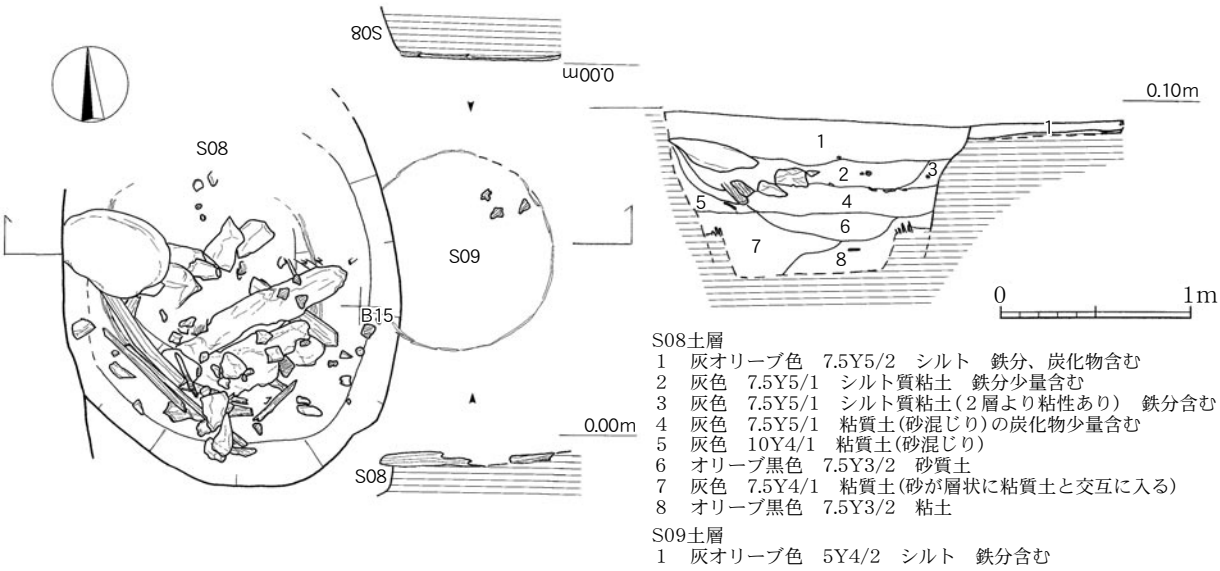
第１遺構面上半で検出したが、北側の一部が汚水管の下に入っていたため、井戸全体を調査することはできなかった。掘り方は推定直径1.8ｍである。

この井戸内上面からは石と板材が多く出土し、石の中には長径60㎝の大石もあった。これらを排除すると、中央部に直径1.1ｍの竹製の輪状のタガを確認した。このタガは、井戸の内部構造として使用された桶の板材を抜き取った後に残ったものと考えられた。

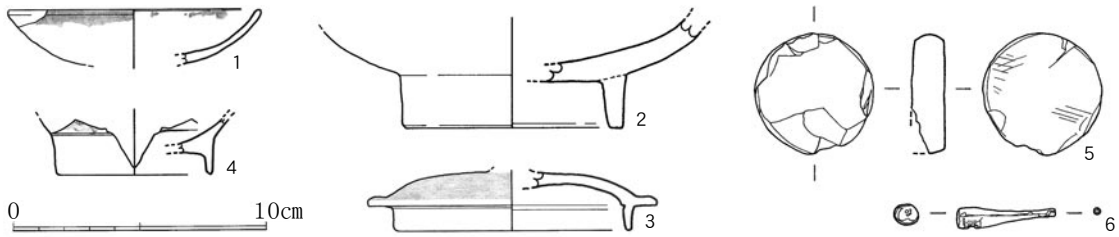
したがって、この井戸の廃棄の際には、桶から板材を抜き取って、一部を石とともに埋めたものと推測される。

２）**出土遺物**（第43図、図版第31）

〔陶器〕第43図１は、備前の灯明皿。内面から口縁部外面にかけて塗土を施す。口縁部に煤が厚く付着する。18世紀後半から19世紀のもの。**２**は、京・信楽系の鉢。内外面に鉄釉をかけ、内面には灰釉を散らす。**３**は、産地不明の蓋物か土瓶の蓋。外面に灰釉がかかり、内面は無釉。



第42図　井戸Ｓ 08・曲物埋設遺構Ｓ 09実測図（縮尺：１／40）



第43図　井戸Ｓ08出土遺物実測図（縮尺：１／３）

〔磁器〕第43図４は、肥前系の広東碗。19世紀代のもの。

〔特殊品〕第43図５は、箱型の焜炉などの大型の土師器を再利用した加工円盤。側面が磨かれているので、完成品である。使用による欠損が甚だしい。

〔金属製品〕第43図６は、煙管の吸口。

２．曲物埋設遺構Ｓ09

１）**遺構**（第42図、図版第15下・16－２）

井戸Ｓ08の東側で検出された遺構である。井戸Ｓ08に切られた直径1.05ｍの曲物の痕跡を確認した。調査してみると、曲物の痕跡は、北側の高いところで８㎝、南側では２㎝ほどしか残っていなかった。底板は検出することができなかったので、もともと底板の無い曲物を埋設したものと思われる。

基底部は、井戸Ｓ08の検出面より少し下という程度である。非常に浅いので、当然井戸の可能性は全く無いことになる。また、この曲物自体がそれほど高さのあるものではなかった可能性があり、用途不明の遺構である。

２）**出土遺物**（第46図、図版第31）

〔特殊品〕第46図１は、土製玩具で、飾り馬。後方の底部に、小さな穿孔がある。

３．土坑Ｓ05（第44図、図版第16－３）

二等辺三角形に近い不整形な土坑である。南北約1.6ｍ、東西1.2ｍ、深さ30～40㎝である。層位的に、水田Ｓ01の下にあり、明治時代の水田Ｓ01内の溝と考えられる溝Ｓ12によって切られているので、幕末頃と推定される。

４．溝Ｓ07（第45図、図版第16－４・５・６）

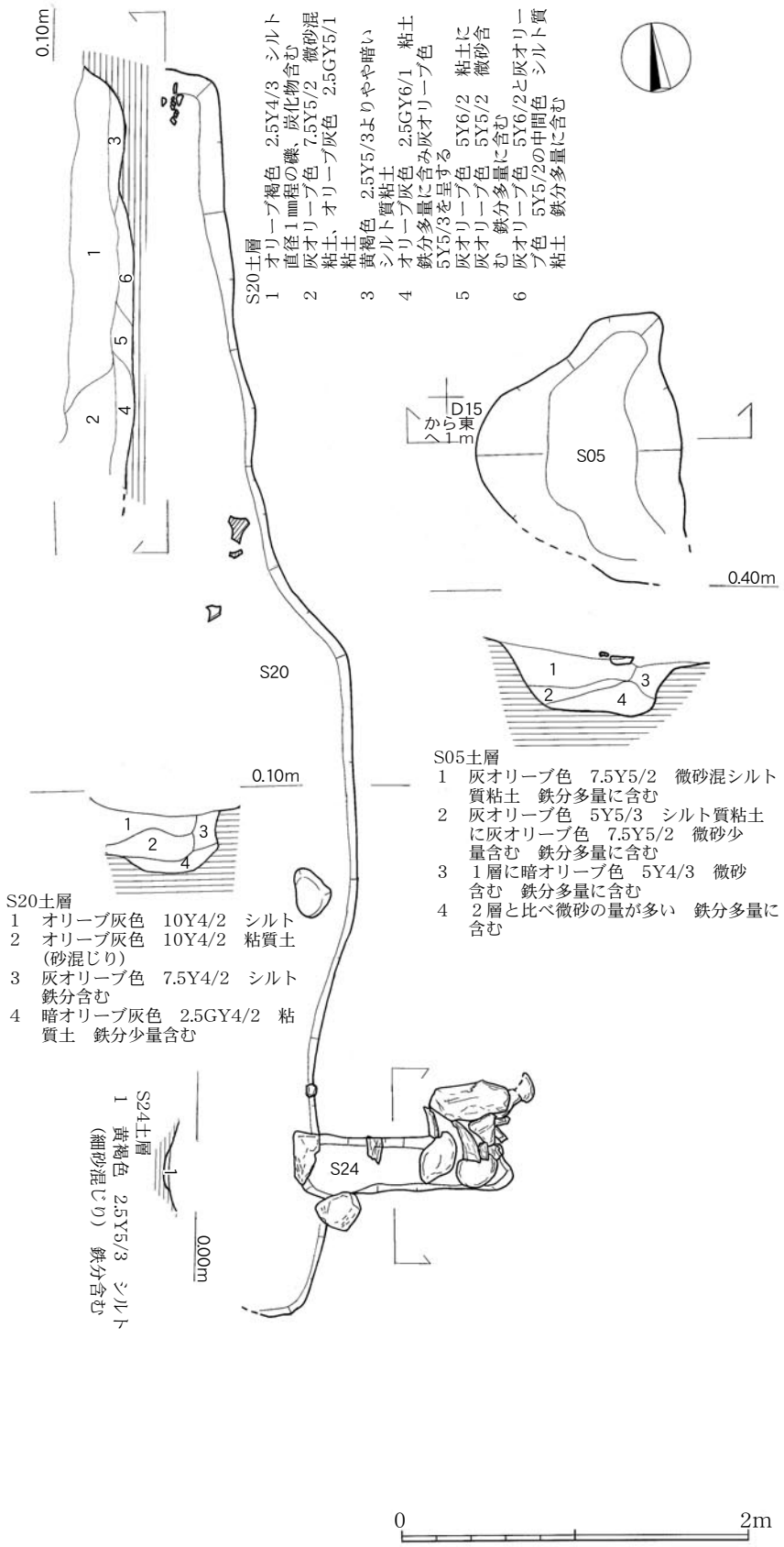
井戸Ｓ08に切られて、土坑Ｓ05近くまで南下する幅22～50㎝の溝である。深さ10㎝ほどである。

溝Ｓ12とともに、水田Ｓ01の方向とほぼ一致し、埋土も水田の土とほぼ同じである。第１遺構面上半の検出であるが、水田Ｓ01の西側端の耕作痕ないしは溝になると思われ、明治時代の遺構の掘り残しである。

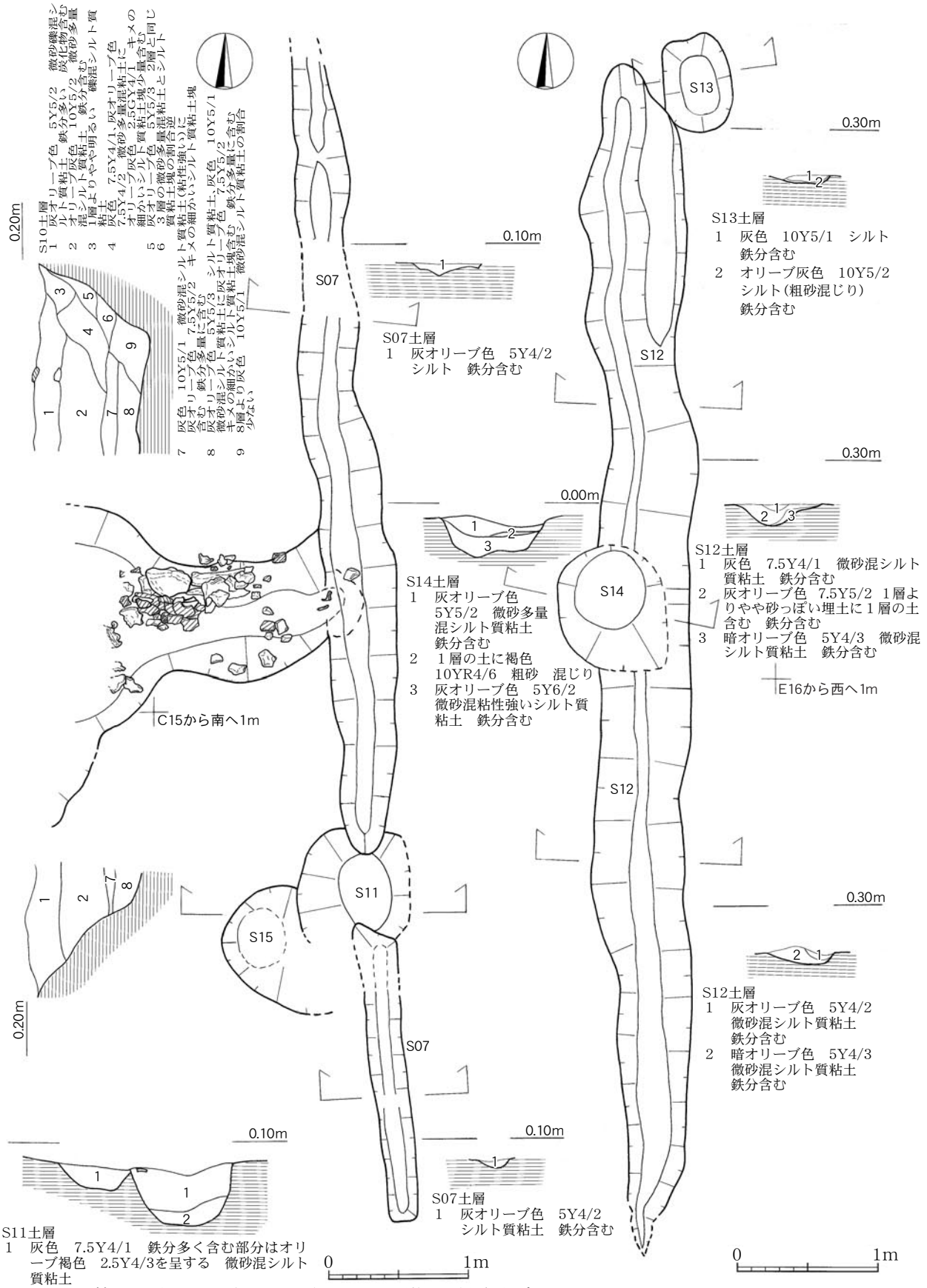
５．土坑Ｓ10

１）**遺構**（第45図、図版第16－７）

Ｂ・Ｃ15区で検出した土坑になると思われる遺構で、西側は調査区外にのびる。東側は明治時代と思われる溝Ｓ07によって切られている。南北幅は西側で約2.3ｍ、東側で約80㎝を測り、東西は現存



第44図　土坑Ｓ05・Ｓ20・Ｓ24実測図（縮尺：１／40）



S11土層
1　灰色　7.5Y4/1　鉄分多く含む部分はオリーブ褐色　2.5Y4/3を呈する　微砂混シルト質粘土
2　灰オリーブ色　5Y5/2よりやや暗い　キメの細かいシルト質粘土　鉄分多量に含む

S15土層
1　灰オリーブ色　5Y4/2よりやや灰色強い　鉄分多く含む部分はオリーブ褐色　2.5Y4/4を呈する　微砂混シルト質粘土

第45図　溝Ｓ07・Ｓ12、土坑Ｓ10・Ｓ11・Ｓ13・Ｓ14・Ｓ15実測図（縮尺：１／40）

で1.8ｍ確認できた。西側で大きく広がる土坑と思われる。深さは80㎝ほどである。

２）**出土遺物**（第46図）

〔瓦〕第46図2は、巴文の軒桟瓦。**3**は、唐草文の軒平瓦。

６．土坑Ｓ 11（第45図、図版第16－８）

揚水施設Ｓ 04北側で検出した。この揚水施設Ｓ 04周辺は、遺構の切り合いが複雑で、平面・断面観察を何度も行った結果、Ｓ 15→Ｓ 11→Ｓ 07→Ｓ 04･Ｓ 17の順序を最終的に確認した。径80㎝前後、深さ40㎝ほどのほぼ円形に近い土坑である。

７．溝Ｓ 12（第45図、図版第17－１）

土坑Ｓ 05の南側から溝Ｓ 07の延長方向と一致する方向で南下し、南側は撹乱により壊されている。現存で長さ約8.4ｍを測り、幅は広い部分で60㎝を測る。位置的に、水田Ｓ 01内の西端南側の溝状の落ち込みに対応するので、溝Ｓ 07とともに水田Ｓ 01内の西側端の耕作痕ないしは溝になる可能性が高い。

８．土坑Ｓ 13（第45図，図版第17－２・３）

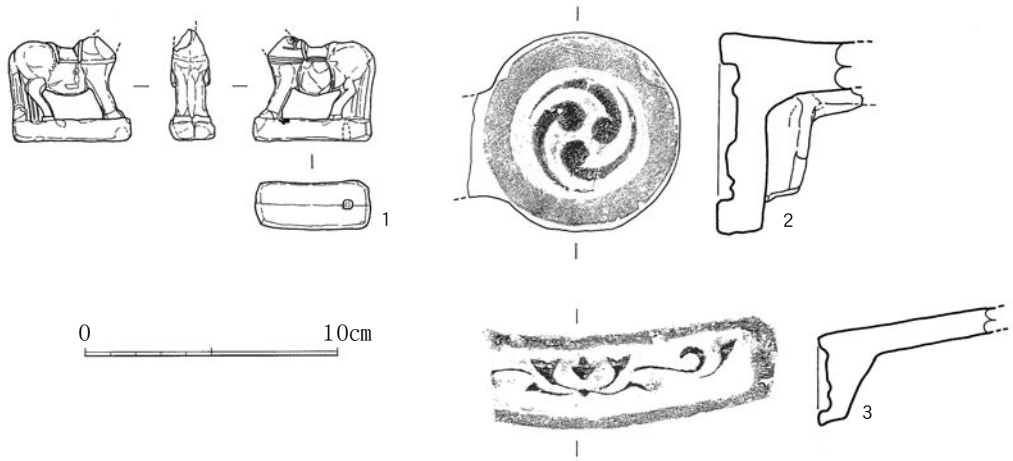
溝Ｓ 12の北端東側で検出した長軸70㎝、短軸50㎝、深さ７㎝ほどの小さく浅い土坑である。南西端を溝Ｓ 12で切られているので、土坑Ｓ 05と同じく幕末頃の時期が想定される。

９．土坑Ｓ 14（第45図、図版第17－４・５）

Ｄ 15区で検出した長軸90㎝、短軸約80㎝、深さ30㎝弱のやや楕円形に近い土坑である。溝Ｓ 12によって切られている。

10．土坑Ｓ 15（第45図）

揚水施設Ｓ 04と土坑Ｓ 11とによって切られていて、正確な大きさは確定できないが、短軸60㎝強、長軸80㎝以内、深さ20㎝の土坑である。



第46図　曲物埋設遺構Ｓ 09、土坑Ｓ 10出土遺物実測図（縮尺：１／３）

11.　土坑Ｓ 20（第44図、図版第17－６・７）

Ｃ・Ｄ15区の調査区西壁際で検出した大きな土坑と思われる遺構である。西側端で幅約7.1ｍを測る。深さは約35㎝である。

12.　土坑Ｓ 24（第44図、図版第17－８）

Ｄ15区で検出した東西に細長い土坑で、東側は高圧線の掘り方で壊されているが、この撹乱以東にはのびない。西側は土坑Ｓ20を切っている。東西約1.2ｍ、幅30㎝、深さ５㎝ほどの浅い遺構である。この遺構の上、特に東側周辺では人頭大の川原石・青石が集中していたが、これらの石とこの遺構との関係性は認められなかった。

第７節　明治時代水田面で検出された遺構と遺物

１．水田Ｓ 01

１）遺構（第47図、図版第18）

ほぼ南北方向に向いた水田の西側端が調査区のほぼ中央で確認された。南側端も確認されて、一部ではあるが、水田面の南西側の輪郭を検出することができた。灰色粘質土が20㎝ほど堆積していたが、南側に行くにつれてその厚さは薄くなっていた。

検出面で粗密はあるものの、ほぼ全面で南北方向の鋤痕を確認した。東西方向の鋤痕は南北方向のものに比べると少ない。また、西側端には溝があり、この溝は水田の南側に延びる溝Ｓ02と関連するかもしれない。

また、前節で記述した溝Ｓ07と溝Ｓ12とは、この水田の西側端の耕作痕ないしは溝になる可能性が非常に高い。水田は耕作により、何度も掘り返されるので、特に水田端部は深く掘り返されていたものと想像される。

水田の西側端斜面では、畦部に大豆を植えていたのではないかと推測される痕跡を確認した。このことに関しては、その痕跡内の土壌と周辺の土壌を採集して、自然科学的分析を行った。その結果は、第４章の「常三島遺跡工学部電気電子棟地点における花粉分析」で明らかにされている。

２）出土遺物（第50図）

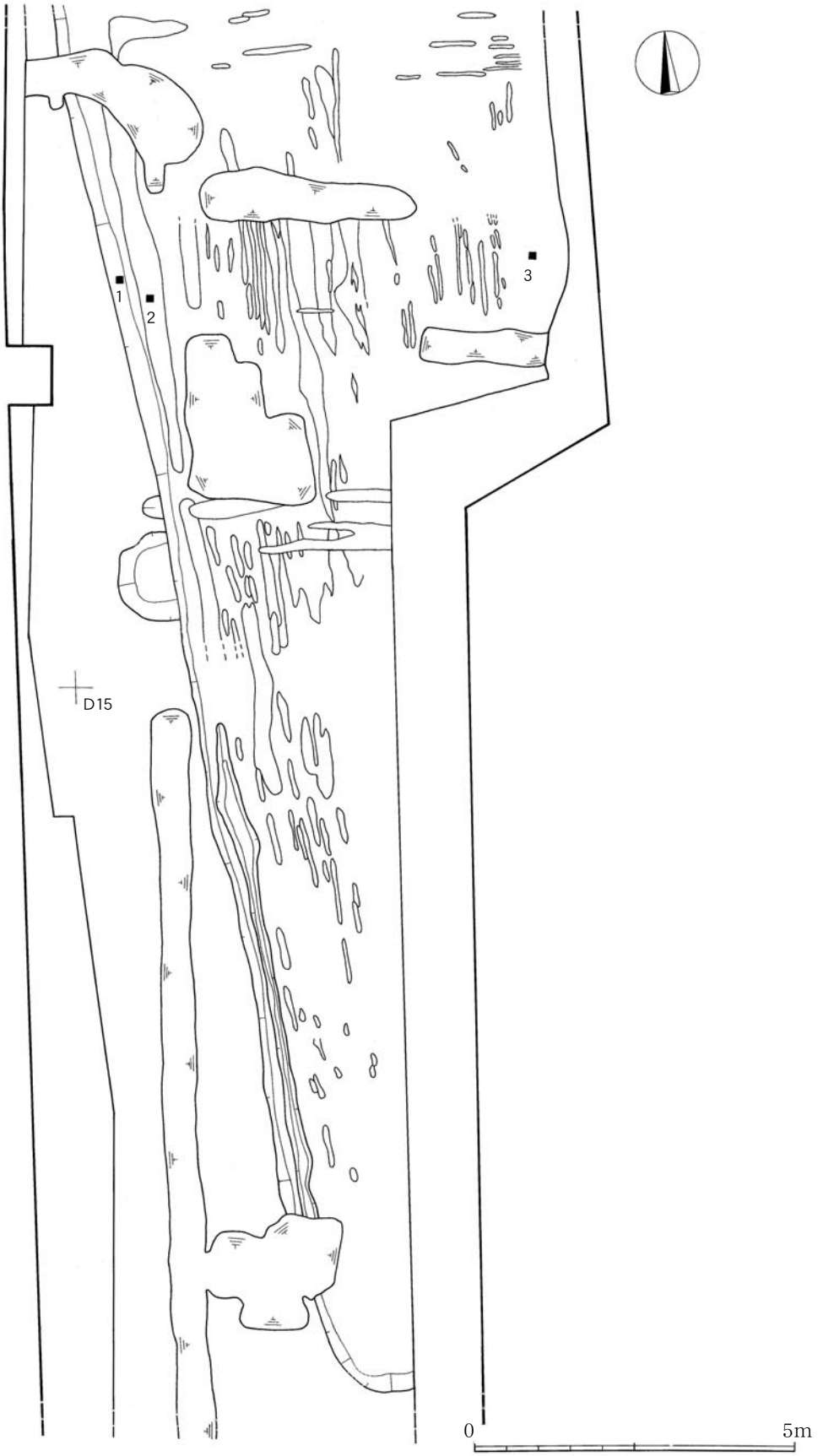
〔特殊品〕第50図１は、小型の土錘で、半分以上が欠損している。

〔金属製品〕第50図２は鉄製品で、カンナの刃と思われる。**３**は、鉄釘である。頂部を折って頭部とした皆折釘である。

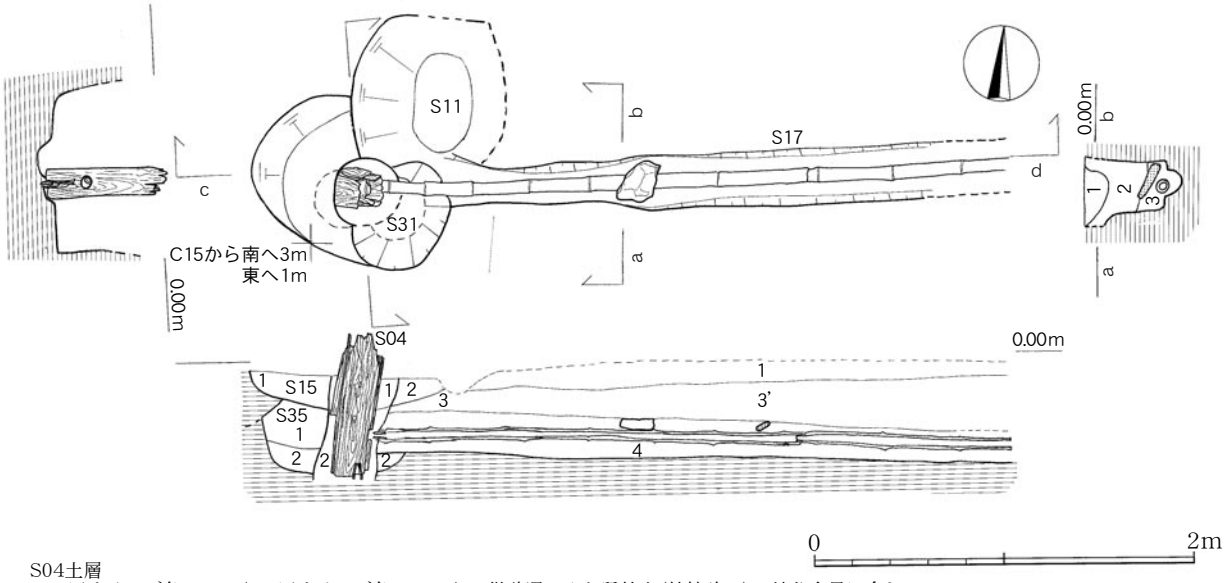
２．揚水施設Ｓ 04・暗渠Ｓ 17（第48図、図版第19・20・21－１～３）

水田Ｓ01を調査中にその西側端で、水田に切られた小さな木組遺構の揚水施設Ｓ04を検出した。この木組遺構は二重になっている。堅固に作られた内側の木組があって、その底から30㎝上にこれを取り巻くように外側の木組が作られていた。

当初性格不明であったので、南側を半裁しながら調査を徐々に進めたが、水田Ｓ01を掘り下げた後の第１遺構面上半で、この揚水施設Ｓ04から東に延びる竹樋遺構である暗渠Ｓ17を検出し、揚水施設であることが分かってきた。



第47図　水田Ｓ01実測図（縮尺：１／100）　■は花粉分析用土壌サンプル採集地点



S04土層
1　灰オリーブ色　5Y5/2　灰オリーブ色　5Y5/3　微砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分多量に含む
2　灰色　7.5Y4/1と灰オリーブ色　7.5Y4/2の中間色　微砂多量混粘土

S15土層
1　灰オリーブ色　5Y4/2よりやや灰色強い　鉄分多く含む部分はオリーブ褐色　2.5Y4/4を呈する　微砂混シルト質粘土

S35土層
1　灰色　7.5Y4/1　微砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分多量に含む
2　灰オリーブ色　7.5Y5/2と灰オリーブ色　7.5Y4/2の中間色　微砂多量混粘土

S17ａ－ｂ土層
1　灰オリーブ色　5Y4/2　シルト質粘土　鉄分含む
2　灰オリーブ色　5Y5/2　シルトに灰色強い灰オリーブ色　7.5Y5/2　微砂混シルト質粘土斑状に含む　鉄分多量に含む
3　かなり灰色強い灰オリーブ色　5Y5/2　微砂多量混シルト質

S17ｃ－ｄ土層
1　灰オリーブ色　5Y5/2　シルトに灰色　7.5Y5/1　微砂混シルト質粘土斑状に含む　鉄分非常に多く含む
2　灰オリーブ色　5Y4/2　微砂少量混シルト質粘土に灰オリーブ色　5Y5/3　キメの細かいシルトを斑状に含む　鉄分多量に含む
3　灰色　7.5Y5/1　微砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分多い
3’灰オリーブ色　5Y5/3　微砂混シルト質粘土(粘性強い)に３層の土を斑状に含む　鉄分多量に含む
4　かなり灰色強い灰オリーブ色　5Y5/2　微砂多量混シルト質粘土

第48図　揚水施設Ｓ04・暗渠Ｓ17実測図（縮尺：１／40）

暗渠Ｓ17は、幅30㎝、深さ40㎝の溝を掘り、その底に竹樋を埋設したものである。揚水施設Ｓ04の東側板の下部に孔があり、竹樋はその孔に結合されている。竹樋の１本の長さは揚水施設Ｓ04と結合したもので2.2ｍあり、それには固定のために平らな石がほぼ中央部分に置かれていた。暗渠Ｓ17は東側に向かってレベルを下げていて、結合部と調査区東端部との比高差は約10㎝であった。

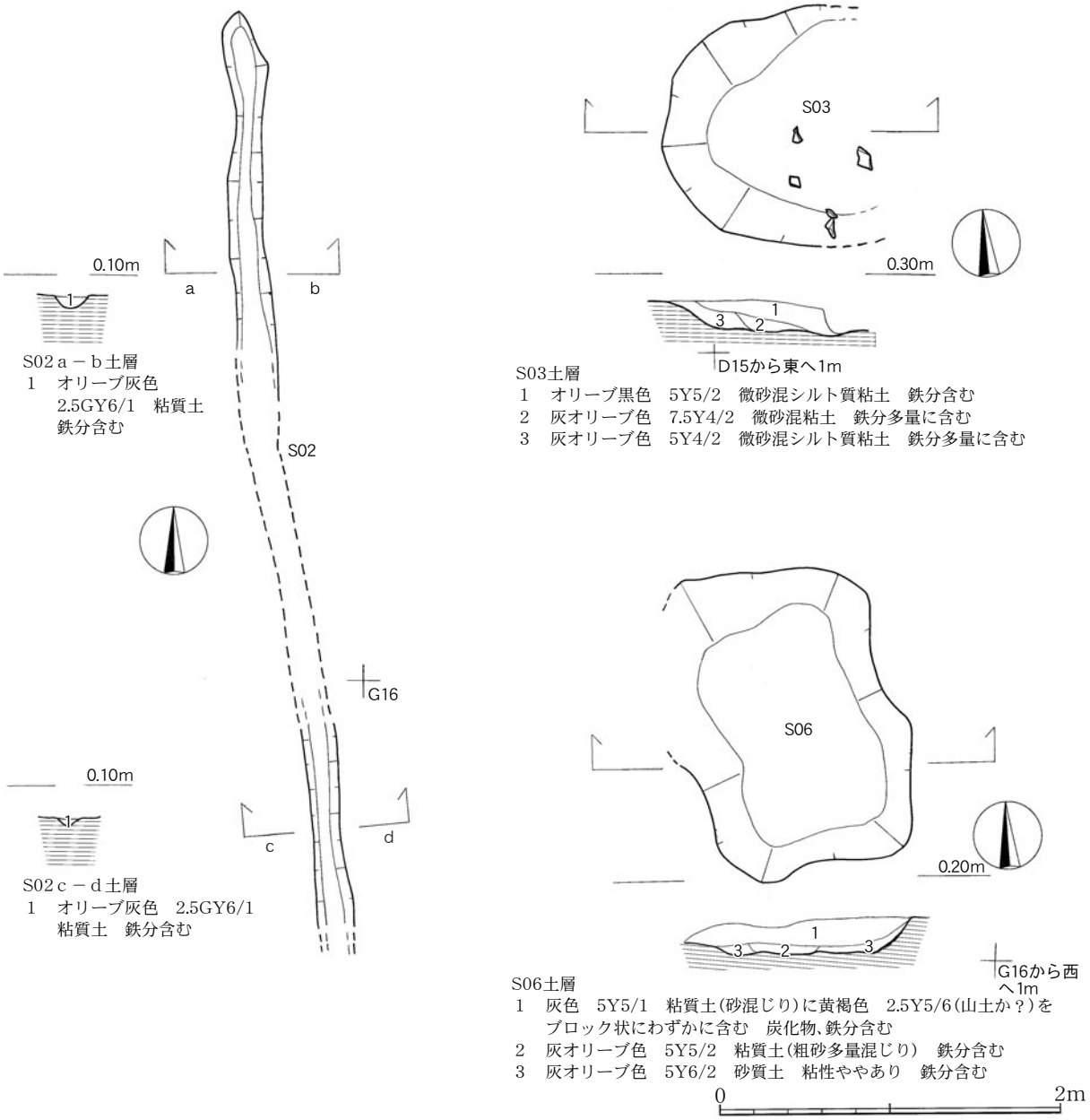
さらに精査をして、揚水施設Ｓ04の底で砂地に竹を垂直に打ち込んでいる痕跡を確認した。この竹の中に錘球を入れて深さを確認したところ、現状で深さ2.2ｍほどであった。

構造から見て、地下水を自噴させて東側へその地下水を導水する施設と思われるが、調査区外に竹樋の暗渠が延びているため、どのような所へ導水していたのかは不明である。

揚水施設Ｓ04の掘り方がＳ01水田によって切られていて、前節で記述した水田Ｓ01内の溝の可能性が極めて高い溝Ｓ07によって暗渠Ｓ17が切られているので、水田Ｓ01より古い可能性があった。しかし、水田は毎年耕作によって掘り返されているので、水田として利用されていたある時期にこの揚水施設Ｓ04・暗渠Ｓ17が設置されたものとみられる。したがって、水田Ｓ01と同時期の明治時代と判断される。

３．溝Ｓ02（第49図）

水田Ｓ01の西側端のほぼ延長線上の南側にある幅30～45㎝、深さ４～８㎝の細い溝である。この溝の北端は水田Ｓ01を切り込んでいて、また水田Ｓ01の方向とは若干ずれる。しかし、埋土は水田Ｓ



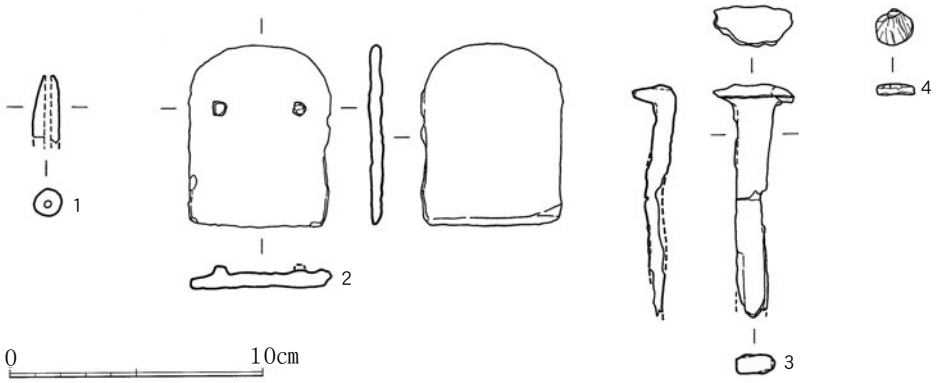
第49図　溝Ｓ02、土坑Ｓ03・Ｓ06実測図（縮尺：１／40）

01とほぼ同じなので、水田Ｓ01と関連する溝の可能性が高い。

４．土坑Ｓ03

１）遺構（第49図、図版第21－４）

水田Ｓ01によって東側部分の約半分が切られている。もともとは円形ないしは楕円形の土坑であったと思われる。南北1.4ｍを測り、深さ20㎝弱である。この土坑は、一方で揚水施設Ｓ04を切っている。明治時代の水田Ｓ01によって切られ、同じく明治時代の揚水施設Ｓ04を切っているので、水田Ｓ01と揚水施設Ｓ04とほぼ同時期の明治時代の遺構と思われる。水田Ｓ01は何度も耕作で掘り返されるので、水田Ｓ01が存在している時期で、揚水施設Ｓ04設置以降の時期となろう。



第 50 図　水田Ｓ 01、土坑Ｓ 03 出土遺物実測図（縮尺：１／３）

２）**出土遺物**（第 50 図、図版第 31）

〔特殊品〕第 50 図４は、土製の泥面子。貝をモチーフとしている。

５．土坑Ｓ 06（第 49 図、図版第 21 － 5 ・ 6）

調査区の南半部で検出した、東西約 1.3 m、南北約 1.8 m、深さ 20 ㎝ほどの隅丸長方形の土坑である。長軸の方向が水田Ｓ 01 や溝Ｓ 02 の南北方向とほぼ平行しているので、水田Ｓ 01 や溝Ｓ 02 に関連する遺構の可能性が高く、明治時代と思われる。

第８節　考古学的まとめ

今回の工学部電気電子棟地点発掘調査では、予想もしなかった船入状遺構と考えられる遺構を検出したことが最大の成果と言えよう。それも上層に 17 世紀後半から 18 世紀にかけてと思われる石組み船入状遺構Ｓ 36 が、下層に 17 世紀前半から中頃と思われる素掘り船入状遺構Ｓ 41 が互いに少し離れてはいるものの、層位的に重複していたのである。

素掘り船入状遺構Ｓ 41 は、東側のごく一部を確認したのみであるが、出土遺物から 17 世紀前半から中頃の時期と推定された。調査区西壁の崩壊などにより、遺物の収集方法に若干の問題はあったものの、出土位置などを詳細に検討していくと、前述したようにこの素掘り船入状遺構Ｓ 41 は 17 世紀前半から中頃の時期に限定でき、石組み船入状遺構Ｓ 36 との層位的な関係、およびＳ 36 出土遺物との関係でも、その時期が妥当と考えられた。

この 17 世紀前半から中頃にかけての時期、現在の工学部付近は安宅島と呼ばれ、『徳島藩領国図屏風』や国文学研究資料館史料館所蔵『御山下画図』（寛永年間製作と推定）など、江戸時代初期の屏風･絵図には徳島藩の船置所が描かれている。これらの屏風や絵図には助任川から西に向かう水路が描かれている。この水路から南側に入るドッグ状の船着場を造っていたと推測すれば、素掘り船入状遺構Ｓ 41 はそれに該当する可能性が非常に高い。しかし、この公的な船置所は、17 世紀中ごろに福島安宅へ移される。

石組み船入状遺構Ｓ 36 は、その西側に緑泥片岩の石組み護岸を構築している。層位的に素掘り船入状遺構Ｓ 41 の上に設置され、17 世紀後半から 18 世紀の遺物が出土している。この時期には、すでに福島安宅に新船置所が建設されている。

いっぽう、17世紀中頃に旧安宅島は宅地化されていくことが個人蔵『阿波国徳島城之図』（1646年）の絵図で確認され、この地は民澤家の屋敷地となる。絵図には描かれていないものの、17世紀前半の旧安宅島の船置所施設などを宅地化以後も利用して、宅地内に船入を造り、私的な水運を行っていたのではないかと憶測せざるをえない。

その場合、屋敷地内に近くの助任川へ通じる水路があって、その水路が屋敷地東側の道路を分断していたことになる。そのあたりの屋敷地内の土地利用のあり方、武家屋敷の区画のあり方、道路のあり方などとも関連して、以上のような推測が可能なのかどうか、今後の検討課題である。

ただし、2004年度に埋蔵文化財調査室が発掘調査を行った新蔵遺跡（第2図）での知見では、隣接する屋敷地内を通過する水路も存在し、絵図には描かれないものもあることを確認している。そのようなことから考えると、常三島地域で最も敷地面積の広い民澤家に、屋敷地を通過する水路があり、船着場的なものが存在していたのでないかという推測は十分可能ではないかと思われる。

以上のような判断をとりあえずは下しているが、調査面積が狭く、ほとんど絵図などを念頭においた想像の域を出ない解釈ではある。本調査のあと、第16次調査の総合科学部3号館地点、第17次調査の工学部建設棟地点、さら第10・13次調査の工学部共通講義棟地点、第11次調査の工学部共同溝Ⅱ期地点の成果を今後合わせて、最終的な安宅島の船置所、および宅地化以降にも水路を造って、宅地内に船をいれていたということを考古学的に実証していきたい。

次に、発掘調査区内における土地利用に関してである。第1節の調査の概要の項目で述べたが、第1遺構面で検出された溝Ｓ19以南には、ほとんど遺構が見られなかった点が特筆される。発掘調査面積が狭いこともあり、断定はできないが、江戸時代初期の船置所があった時期も、少なくとも調査区地点には、構造物などは造られていなかったと判断される。

宅地化されて、民澤家の屋敷地になった時点でも、構造物は造られなかったようである。調査区は、民澤家の南端であり、推定される道路に極めて近い場所になる。これに関しても、前述した工学部共通講義棟・共同溝の発掘調査の成果とあわせて、考察を加えていかねばならないと思っている。特に、上述したように、民澤家は常三島では最も広い面積を有した屋敷地であるので、上級武士の屋敷地である新蔵地区などの発掘成果ともつき合わせて考えていく必要性がある。

なお、石組み船入状遺構Ｓ36の石組み部分に関しては、新電気電子棟渡り廊下の階段部分の位置を変更することが可能であったため、その部分のみ簡易に囲繞し、真砂土を入れて埋め戻して保存することにした。

そして、新電気電子棟の渡り廊下に、石組み船入状遺構Ｓ36の位置を廊下床面に青石（緑泥片岩）を埋め込んで表示すると共に、説明板を床に埋め込んだ（図版第32）。

説明版はタイトルを『常三島遺跡　船入状遺構』とし、石組み船入状遺構想像復元図とともに、

「2002年の発掘調査で、素掘り船入状遺構（17世紀前半）と石組み船入状遺構（17世紀後半～18世紀）とが重複して発見された。江戸時代の常三島の変遷を知る上で貴重な遺構であり、石組みは現地に保存されることになった。

工学部付近は安宅島と呼ばれ、徳島藩の船置所が1639年まで置かれていたが、以後福島へ移転する。素掘りは藩の船置所に関連する遺構、石組みは福島安宅へ移転した後、武家屋敷として宅地化されたが、前船置所の水路などを再利用した家臣の私的船置所として使用されていたと推定される。」

という文章を付した。この中で、船置所の移転年代を 1639 年と具体的な年代を示しているが、17 世紀中ごろとするより、時期的なイメージがつかみやすいということで、いくつかある移転年代説のうち、2002 年当時最も蓋然性が強いだろうと思われた 1639 年という年代を採用した。

国民共有の財産である埋蔵文化財の一部を後世の人々に残していくこと、遺構の位置を示し説明することは、歴史教育や埋蔵文化財保護、そして大学・社会における教育普及活動にも大いに意義のあるものである。今後も、常三島遺跡のみならず、江戸時代の遺跡である新蔵遺跡、弥生時代を中心とする複合遺跡である庄・蔵本遺跡の三つの徳島大学構内遺跡で、可能な限り遺跡を知ってもらうための解説板などを設置していきたいと思っている。